

ギリシアの競技

——その組織と内容に関する考察——

阿 部 正 臣

序

我々が古代の競技に関心を持つのは、今日の競技と比べて、その中におびただしい類似性があることで、今なおギリシア競技の理想から学ぶべきことがあるからである。確かに我々はギリシア競技の歴史や競技を衰退させた原因などから多くの教訓を得ていると共に、その衰亡に導いた悪が余りにも今日のスポーツの中に多く現われているのに気付くのである。今まで「オリンピアの起源」、「オリンピア競技の歴史」、「ギリシア競技と芸術」、「古代ギリシアのプロフェッショナリズム」に関して述べてきたが、今回はギリシアの競技的な祭礼のプログラムを構成する色々な競技種目について述べて見たいと思う。

ギリシアの競技に関する知識及び情報は古代オリンピアと同じように後代の著者や芸術品から引き出されたもので、非常に不完全である。例えば、一般的な概要は比較的明瞭であるけれど、競技種目の詳細——特に競技規則と組織内容、及び技術内容などに関しては不確実で不明瞭である。しばしば古代と今日の競技者の力を比較することが試みられているが、そのような試みのすべては取るに足りないもので、そういった証拠は存在していない。しかし、ギリシア芸術、特に壺絵からギリシアの競技者のフォームをある程度形づくることは可能であり、今日の走者や跳躍の競技者などと比較することも可能である。本論は絵図を入れて、その技術解説並びに競技の組織内容を究明しようとしたもので、以下、次の順序に従って論が進められている。

I. 競技場と競走

II. 跳 躍

III. 円 盤 投

IV. 槍 投

V. 五種競技

VI. レスリング

VII. ボクシング

VIII. パンクラチオン

本論の特徴は図解を主としていることである。ここでの最大の悩みは最も適正なる

ギリシアの競技

遺物や真正を証拠だてる記述を選択すること、並びに信頼のできる図解がなされているかを確証することで、できる限り写真を使用している。従って、一連の図解は一般の人にも役立つであろう。また研究者のために写真の年代と引用、及びその他の詳細、それに博物館目録を添えてあるので、価値ある資料となるであろう。

I 競技場と競走

ホメロス時代の走者は遠方の目印を回って出発した所に戻り、歴史時代のギリシア人も常に直線の走路を何回か往復して競走を行なっている。従って、ギリシア人は曲線の走路を回る競走を行なっていない。ここにギリシアのスタディウム Stadium⁽¹⁾と呼ばれる走路と今日の走路との間に本質的な違いがある。ギリシアで行なわれた短距離競走は1スターデ Stade の長さの直線走路を走り、他の競走もこの1スターデの走路を何回か往復する競走であったから、競技場はスタディウムと呼ばれた。しかしながら、実際にギリシア各地に於いて測定の規準が一樣でなかったから、スターデの距離は様々である。例えば、ヘラクレスによって歩測されたというオリンピアの走路は192.27m、デルフィの走路は181.30m、アテネの走路は184.30m、エピダウロスの走路は181.30m、プリエネの走路は191.39m、ペルガムンの走路は例外的な210m⁽²⁾というように、各競技場の長さが一定していない。もしギリシアに計時方法があったとしても、明らかに記録を比較することはできないであろう。

それ故、ギリシアの競技場はほとんど幅30mと200mほどの長方形のものである。出発線は砂に線 Gramme を引くか、柱 Nyssai によって印され、決勝線や折返点もこの線や柱が使用された。競技場は自然を利用した堤防か、土盛りした堤防によって囲われていた。オリンピアの競技場はクロノス山の斜地を削って作られたもので、その片側と両端は土盛りされている。エピダウロスは山合いのくぼ地を利用したものであるが、東側の端は土盛りされて高くなっている。囲われた区域は実際に1スターデよりも長く、どちらの端にも約15mほどの余地がある。その端はエピダウロスのように四角形のものもあれば、デルフィやアテネのようにスペンドーネ Spendone と呼ばれた彎曲形のものもある。後代の競技場にはローマの円形競技場 Circus にほぼ近いスペンドーネを持つものもあったが、それは観客の便宜を計ったもので、走路自体は

(1) Krause 「Gymnastics」 pp. 141ff.

Gardiner 「Greek Athletic Sport and Festival」 pp. 251ff.

「Journal of Hellenic Studies」 xxiii, pp. 261ff.

(2) Willy Zschietzschmann 「Wettkampf- und Übungssätten in Griechenland」 p. 7

四角形のものである。

初期の競技場の中で最も興味のあるものは恐らくBC5世紀頃に作られたもので、ローマ時代にまで使われているエピダウロスの競技場である。⁽¹⁾ 決勝線と出発線は石板に線と石柱で印され、競技場の周囲には観客に水を提供する水槽に水を注ぎ込む水路が30mの間隔で走り抜け、その配置はオリンピアと類似している。走路の両側には約30mの間隔で小さな角柱が埋めてある。これはオリンピアの女子競走のように短いコースに必要であったことを示し、また槍投や円盤投の計測にも非常に役立っていたに違いない。敷石からなる階段の座席はほとんどマケドニア時代に改修されたものらしい。北側の観客席の中心部には審判官や競技者が物々しい行列を作って競技場に入る弓形のトンネルがあり、走路の南側には恐らく賞品の授与式を行なったと思われるような石壇がある。恐らく初期の頃には審判官などの役人席がいくつかある程度で、観客の大部分は地面に坐ったり立ったりして観戦したものであろう。オリンピアでは、その歴史の末期にさえ、観客用の座席はなかった。

特に面白いのはスタートの設備である。決勝線と出発線はオリンピアや他の所で見られるものと同じく一對の柱の間に条溝の入った敷石を埋め込んだものである。この石の敷居に関しては後で詳細に述べるつもりであるが、恐らくマケドニア時代に導入されたものであろう。元来、出発線は柱の間に引かれた線でなければならないが、敷石の前には横溝の入った5本の柱があって、その溝のところに綱 Usplex や横木を掛け、それが落下した時を出発合図とした、いわゆる発走門を意図するものがある。⁽²⁾ この種の発走門はローマの円形競技場で用いられ、またギリシアに於いても後代になって使用されたことが分かる。しかし、BC5世紀やBC4世紀にそのような装置を使用した証拠はない。

発走門とその装置を明らかにしているのはイストミアの競技場である。⁽³⁾ 一定の間隔に柱の穴があって、その間には条溝のない石の敷居がある。各柱の穴から、6cm離れた所にU字形の止め金が石に入っている。出発線の真中から後方、3mほどの所にスターターの坑があり、そこから各止め金に向って浅い条溝が放射状に走っている。このことから、各走者は鉄道の信号機のような発走門によって出発したことが分かる。発走門の腕木は綱によって働き、その綱は腕木の端からU字形の止め金を通り貫けて坑の所まで条溝にそって走る。そのすべての綱を坑に立つスターターが握り、スター

(1) Praktia, 1902, pp.78~92

(2) Usplex に関しては「Journal of Hellenic Studies」xxiii, p. 263 を参照。

(3) 1956年に Oscar Broneer の発掘によって明らかにされた。

ギリシアの競技

ターが綱を離したとき、すべての腕木は一緒に落ちて、公平なスタートが保証される。ギリシア世界の競技場は出発線に統一的な設備を持っていないが、スターターの坑はイストミア以外の所でも発見されている。またデロス出土のBC3世紀の碑文には柱と腕木のことが述べられている。この碑文で特に興味を持つのは鳴管 Syriux という部分である。これに関してのはっきりした意味は分らないが、恐らくイストミアの綱の条溝と同じ目的を持ち、門を動かす綱を鳴管に通して、出発のときに神経質な競技者の足にからみつかないようにしたものであろう。

競技場の中で最も意匠を凝したものは最も叙情的な所にあるデルフィの競技場である。それはギリシアの競技場の中で最も完全にその面影をとどめている。⁽¹⁾ここは高さ240m までに切り立つパルナウスの絶壁を境内に持った聖地で、岩石の多い台地に競技場は位置し、その下方にはプレイストスの谷とクリサエアの平原が深遠に横たわっている。BC5世紀の後半に山肌を切り崩して台地にし、下方は土工による重々しい擁壁に支えられているので、ラッコマ Lakkoma と呼ばれる一種の細長いくぼ地の中に競技場がある。今日見るところの競技場はパウサニアスが語るように大理石ではないけれど、A.D.2世紀にヘロデス・アッテクスが石に取替えたものである。競走路の両側と両端の彎曲したスペンドーネを巡らして石造の観客席があるが、それらは競技場から1.5mの高さにあって、7,000人の観客を収容することができる。座席の高さの半分に刻まれた階段 Plethron は座席に容易に行けるようにしている。北方の傾斜地にはなおその上に多くの見物人を収容することができ、その中央には貴賓席がある。東側の端には4本のどっしりした柱があるが、恐らく後から無造作につくられた凱旋門の一種であろう。実際の走路は長さ177.5m、幅25.5mで、中央部が広く、28.5mである。この彎曲の目的は全コースを見えるように観客の便宜を計ったものである。出発線と決勝線はエピグロウスやオリンピアのものと同じように条溝の入った敷石が埋めてある。

デルフィの競技場は最初の頃には非常に素朴なもので、祭礼と祭礼の間に走路は、雑草が生え茂って、恐らく牧場に使用されていたと思われる。それで祭礼が近づくと、請負業者が走路を整備したことが色々な記録から分かるが、その中で最も興味深いものはデルフィの執政官 Dion (BC258年)の行政権に関する記事で、⁽²⁾その中には競技場と競馬場、運動場で行なうべき仕事の項目が列記されている。

先ず、走路と土堤の雑草を取って廃物を除くのに15スタテル、それで走路と跳躍場

(1) Bulletin de correspondance hellenique, pp. 601~15

(2) Bulletin de correspondance hellenique. 1899, pp. 564, 613

を掘り起こしてローラーをかけるのに110スタテル、最後に600メディムノス(1 medimnos=83 staters)分の白砂が一面にばらまかれた。次に走路の周囲に柵が5スタテルで作られ、特権的な観客や役人用の一時的な座席が29スタテルで設けられた。それに出発線と折返点に36スタテル、五種競技の円盤や槍などの用具準備に8スタテルの金が使われ、またボクシングなどの人気のある種目を見ようとする観客のために特殊な台を比較的大きな金額である77.5スタテルがあてがわれた。これらの価値を推定することは難しいが、大体、1スタテルは2ドラクマに等しい。ペリクレス時代の1ドラクマは熟練した職人の一日の賃銀で、一般の労働者はほとんど½ドラクマ、つまり¼スタテル以上の賃銀を受けていない。

近年になってアテネの汎アテナイ競技場が近代オリンピックのために再興され、古代競技場を今日の走路として使うには狭くて決して満足できるものではないけれど、その素晴しさは格別である。元来、BC4世紀にリュクルゴスによって建造されたものであるが、デルフィの競技場と同じく、ヘロデス・アッテクスが一層壮大に再建したもので、競技場の下面から1.8mほどの高さに大理石の観客を収容できる46段の大理石の座席がある。出発する所には2本の石柱が立ち、やはり敷石が埋め込まれている。そして両面向きになった若いアポロンとデイオニュソスを表わしたものとといわれる彫像を乗せた2基の角柱がある。これらの角柱は天頂までが1.8mで、エピダウロスのように後代になって発走のために使用された綱か、横木を通す細目の割れ目が高さ90cmの所にある。

オリンピア、デルフィ、エピダウロスの出発線と決勝線を印す敷石に話を戻そう。これらの敷石は恐らくBC4世紀に遅くとも一般的なものになったものであろう。オリンピアの敷石は約45cmの幅で走路の全幅に及び、一列に並んだ敷石の上には124~141cmの間隔で柱を支えたと思われる四角の穴がある。エピダウロスにもこの柱を入れる穴の跡がある。敷石には横に2本の並行した細い条溝が走り、その条溝の深さは約3cmで、底の下部の方が尖っている。敷石の表面で条溝の口は幅4cmで、前後の条溝の間隔はエピダウロスで10cm、テルフィで9cmと様々である。これは各競技者が立つ位置に付くためのもので、オリンピアの西側の敷石は20に区切られ、東側では21に区分されている。各区切りには1人の走者が入る余裕がある。何故、向かい合わせに敷石を置いたかという、短距離競走であるスターデ Stade 競走では一方が出発線で、反対側が決勝線になったからである。また往復競走 Diaulos でも出発線は決

(1) Frazer 「Pausanias」 ii. 205

(2) Gardiner 「History and Remains of Olympia」 p. 284

勝線になり、それ以上、往復する競走でも1人の走者は常に同一の所に戻って来るから、ちょうど向かい合わせに敷石を固定したのである。

ここで「柱の目的は何であるか」、また「2本の平行した条溝線は何のために使われたか」という問題が生じてくる。今日の短距離競走がそうであったように走路は綱によって仕切られていたとも考えられるが、これを示唆する証拠もなければ、否定するものもない。これは別として、192.27mの直線競走に於いて走者が真直ぐに走るには何か固定した目標が必要であり、承知のように往復競走に於いて走者は柱の回りを回っているから、特殊な印を付けた柱はその道標として非常に役立っていたと思われる。

平行した2本の条溝線が何に使われたかを考えるのは非常に難しい。走者が溝に手をついてスタートしたとも考えられるけれど、今日のスタート姿勢をいくつか取り出して見ても、クラウチング・スタートを行なったとは思えない。この唯一の説明として走者が同じ姿勢から同時にスタートすることがより公正であるとギリシア人が考えたのか、あるいは不正出発を防ぐために両足間の距離を溝に合わせてスタートしなければならなかったのか、ということが考えられる。この条溝は今日のスターティング・ブロックと同じく足に押す力を与えるのに役立ったに違いない。このことから、ギリシア人が実際にスタンディング・スタートの姿勢、つまり一方の足を10cmほど後ろにずらした姿勢で出発する方法を用いたことが想像できる。事実、条溝の彫りは走路に向かって前側の面が長く緩く、後側の面が短く鋭く立っているのが認められる。

第1図にはスタートしようとしている走者が最も良く描かれている。若い走者が出発線を印す柱の側に立ち、スタートの準備体勢を取り、反対側には不正出発をした時に細長い鞭で懲らすトレーナーがいる。第2図に表わされている武装の走者にはさらに立った姿勢が見られる。この像は左手に楯を持っていたようであるが、楯はこわれてない。同じような姿勢は第3図のルーブル美術館所蔵の耳付壺にもまた描かれている。これも武装の走者で、走者に向かって伸ばし手の甲を少々上方に返したトレーナーが立っているが、あたかも「用意」という声が聞けそうな仕ぐさである。武装した走者の姿勢は楯によって邪魔されて少々ぎこちなく、武装していない走者よりも固く強張っている。しかし、これらのスタート姿勢や他のスタート姿勢では両膝を少し曲げて足を合わせるようにし、片足を少しずらしているに過ぎない。これは触れ人が「バルピスで足を合わせて位置に付くように⁽¹⁾」と競技者を呼び出す古い詩の中にもはっきりと述べられている。出発の合図は「アピテ Apite⁽²⁾」とさげぶ触れ人によってなされた

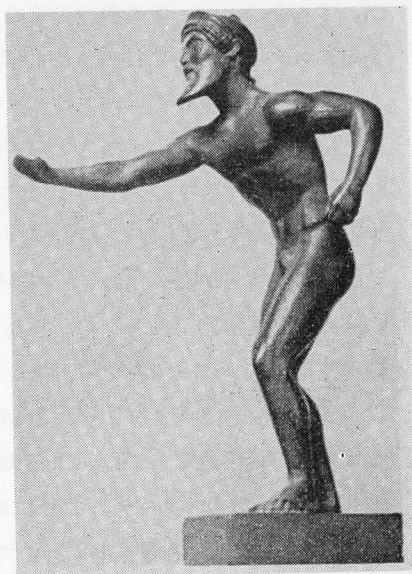
(1) Pomtow 「Poetae dyrici Graeci Minores」 ii. 154

(2) アリストファネス「騎士」1161



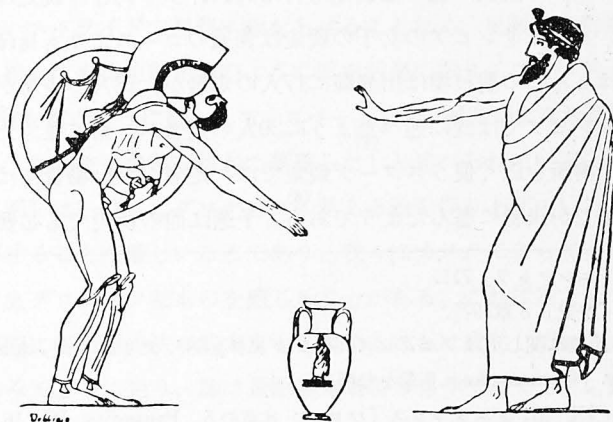
第1図 スタートを練習する走者
B C 460 年頃のアテッカ赤絵皿 ポストン美術館蔵

この壺は正式にはナポリ美術館のものであったけれど、今日ではポストン美術館にある一時消失していたので、クラウゼの線画でしか知られていなかった。表面の線がすり切れているので C.T. Seltman の写真より復写。



第2図 出発の姿勢を取った武装走者
B C 490年～480年頃の像(高さ164cm) チュビンゲン美術館蔵

右腕の楯とかぶとの前立てがない。Hauser 「Jahrbuch」 p. 95 Ridder 「Bulletin de correspondance hellénique」 p. 21 Gardiner 「Journal of Hellenic Studies」 xxiii, p. 269



第3図 武装競走のスタート

B C 470年頃のアテッカ赤絵壺 ルーブル美術館蔵 G. 214 Gardiner 「Journal of Hellenic Studies」 xxiii, p. 20.

よく見掛けると壺の両側に1つずつ、つまり2つの絵が描かれている。その間には壺そのものが描かれている。

ギリシアの競技

か、さもなければ、戦車競走の時のようにトランペットの音で行なわれたのであろう。⁽¹⁾走者がスタートの時に1, 2mでも早く出ようとするのは当然のことで、非常に緊張しているために出発合図の前に飛び出すことがある。この飛び出しを防ぐためにスタートの姿勢を取らせたのである。不正出発をした場合のギリシアの方法は今日よりも思い切ったもので、サラミス海戦の前の歴史的な会議に於いてアデイマンタスがテミストクレスに「早く出過ぎれば鞭で打たれる」と述べているように、競技会の秩序を保つために審判官 Hellanodikai は細長い鞭を用い、体育場 Palestra や運動場 Gymnasium に於いても同じことが行なわれていた。第78図の壺絵には違反者を罰するために鞭を使用しているトレーナーが描かれている。

各競走の長さはスタディウム Stadium、つまり競技場の長さによって決められ、オリンピアの短距離競走 Stade は 192.27m の直線路の競走で、これを往復した往復競走 Diaulos は 2 スターデ、つまり 384.54m であった。長距離競走 Dolichos は 7, 12, 20, 24 スターデと、各競技場に於いて競走距離が様々である。⁽³⁾ イストミア や ネメア では 4 スターデの競走をヒッポス Hippos、⁽⁴⁾つまり馬のデアウロスと呼んでいるが、それは競馬場 Hippodromos の長さが競技場の長さの 2 倍であったので、そのように呼ばれた。さらにこの言葉は馬にのみ適したという非常に体力を消耗する中距離競走に対して用いられた特殊な競技用語であろう。パウサニアスは「A. D. 81年から89年までに8回も優勝しているヘルモゲノスは同僚からピッポスという仇名で呼ばれた」ことを記述している。⁽⁵⁾ 年齢別の色々な競走も行なわれ、少年向きの競走は大人の距離よりも少し短く、またオリンピアの女子の競走は普通のコースよりも $\frac{1}{6}$ ほど短い。

ギリシアのほとんどの競技場は出発線に17人の走者か、18人の走者が並ぶようになっている。オリンピアでは既に述べたように20人の走者が一緒に並ぶだけの区切りがある。しかし、場所を広く使うスターデ競走では、走者が多い場合には予選を行ない、各予選の4番までが決勝に進んだようである。⁽⁶⁾ 予選は他の競走でも必要に応じて行な

(1) ソポクレス「エレクトラ」711.

(2) ヘロドトス「歴史」8章59行.

(3) Dolichos の距離に関してはソポクレス「エレクトラ」687, アリストファネス「鳥」291 フィロストラトス「Gymnastika」Ⅱ章を参照。

(4) Bacchylides. IX. 25, プルタルコス「ソロン」8章の5, Pausanias, VI. 16. 4

(5) Pausanias, VI. 8. 3

(6) Pausanias, VI. 13. 2

Gardiner は「Athletics of Ancient World」p. 136 の所でこの Pausanias のテキストは誤であるとし、「4人の走者が予選を行なって勝者のみが決勝に進出した」と述べているが、私は Pausanias のテキストを上記のように解釈した。

(1)
われた。

直線の走路を走る短距離競走 Stade では走者は当然、自分の柱 Kampter に向かって直走したが、往復競走 Diaulos や長距離競走 Dolichos ではどのような方法で走ったのか、また各走者が自分の柱の左側を回って平行に走路を走ったのか、あるいは真中の 1 本柱を全競技者が回ったのか。オリンピアの敷石の中で真中の穴は 7.5cm×10cm で、他の穴より大きい。また長距離競走の描写によると、折り返しは疑いもなく戦車競走のように中央の柱の 1 本を回ったようである。しかし、より短い往復競走に於いて走者がすべて中央の柱を回らねばならないとすれば、スタートで端の方に並んでいた走者が非常に不利になる。折り返しの所で走者達が混戦して、4、5m も容易に損をするだろう。このことは、走者が直ぐに散ばる 5,000m 位の長距離競走であれば、問題ないが、往復競走 Diaulos のような競走では非常に重要な問題になる。既に引用したデルフィの碑文は 1 本柱の折り返しについて何も語っていない。しかし、何本かの柱を折り返すことは言及されている。従って、往復競走 Diaulos の走者は自分の走路を走り、自分の走路の柱を回ったと結論づけられる。それで折り返しの所は常に左側を回り、二本笛を意味するデアロス⁽¹⁾は正にそのコースを述べている。

短距離走者と長距離走者の走法の違いは B C 6 世紀頃から B C 4 世紀頃までの汎アテナイの競技会で渡された賞品の壺にはっきりと描かれている。長距離走者の走法は実に素晴らしい(第 4、5 図)。彼の腕は少しも強張った感じがなく、両手を腰の所で軽く自由に振っている。体はやや胸を進めかげんに前傾し、頭は直立している。地面をはいような長いストライドで無理に踵を上げることなく、足親指の付根で走っている。フィニッシュに於いても短距離走者のように腕を活発に振り、フィロストラトスが述べるように「両腕を翼のように動かして」スパートした。ギリシアの短距離走者は「翼を広げた鷺のような腕や手で飛び跳ねて驀進した」⁽²⁾と述べられているように、その激しい動作(第 6 図)は一見してグロテスクに見える絵を作り上げている。しかし、短距離走者を描写することは難しいことであり、我々はカメラによって写された短距離走者の動作にさえグロテスクなものを感じることもある。これは別として、ギリシアの芸術家達は実際に短距離走法の基本点を再現することに成功している。走者は足指の付根のふくらみで上手に走り、踵は長距離走者よりもやや高く上げ、膝は十分に上がって、上体は正しく保たれている。腕の動作は今日の短距離走者と同様に激しい動きを見せている。有名なアメリカのコーチが言うように「腕は走力を大きく助けるもの」⁽³⁾

(1) プラトンの「政治学」266C.

(2) Phitostratus 「Gymnastica」52.

(3) John, Graham 「Practical Track and Field Athletics」

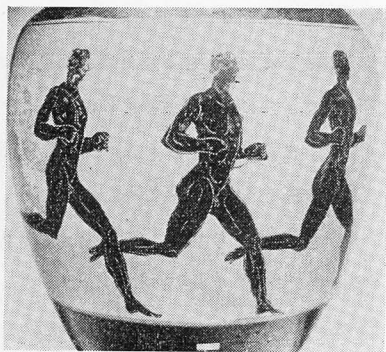
ギリシアの競技



第4図 長距離競走

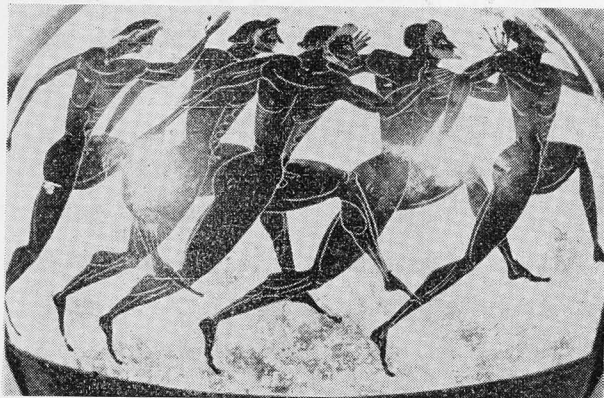
BC 470年頃の汎アテナイの黒絵壺 ノースアンブトンのマルクス・コレクション所蔵

走者は折返点にちょうど達するところで、それを左に回ろうとしている。



第5図 長距離競走

BC 333年の汎アテナイの黒絵壺
英国博物館蔵、B. 609



第6図 短距離競走

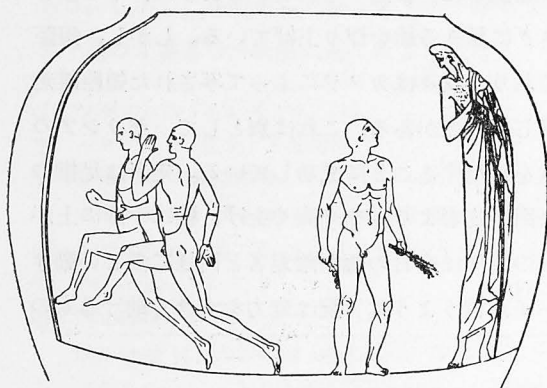
BC 525年の汎アテナイの黒絵壺
ニューヨーク・メトロポリタン美術館所蔵、14.130.12.



第7図 往復競走

BC 550年頃の汎アテナイの黒絵壺断片 アテネ国立美術館所蔵、761.

碑文はΔΙΑΥΛΟΔΡΟΜΟ ΕΙΜΙ, つまり私は往復競走の賞品であると記されている。



第8図 少年の競走

BC 440年頃の汎アテナイの黒絵壺
ボログナ美術館蔵

先頭の者は余裕を持って走っているようで、後を走るもう1人の者は彼を追いつようと力走している。ここでの腕の振りとは右足と左腕が一緒に動き、正しい動きで描かれている。植物の枝を手にした青年は恐らく他の競技の優勝者であろう。Gardiner『Journal of Hellenic Studies』xxxii, p. 179.

であるが、一般に腕を使うことの重要性を忘れがちである。腕は曲げたままではほとんど真直ぐ前後に振り、決して左右に振り回してはならない」ということと、このBC 6世紀の壺絵の姿勢はほとんど一致する。事実、今日のレースの写真と壺絵を比較すれば、如何にギリシアの絵が驚くほどに正確であり、素晴らしいフォームで走っているかを表示できよう。壺絵の画像が実際にグロテスクに見える理由はシメトリーのためである。短距離競走に於いて右腕は実際に左足と共に前方に振り出されなければならないのに、恐らくシメトリーを求めた初期の画家達が右足と右腕を、左足と左腕を合わせてしまったのであろう。

第7図に描かれている走者のフォームは短距離走者のものと同じであるが、腕の動きが少々不活発であるから、往復競走 *Diaulos* の走者を描写したものであろう。第8図には少年競走の絵が描かれているが、そのフォームから見ると、短距離競走 *Stade* を表わしているか、あるいは長距離競走 *Dolichos* のフィニッシュを表わしているかであろう。壺絵から受ける印象によると、その日付け年代は比較的后代のものである。ここでの足と手の動きは正確で、右手、右足は交互に動いている。

ギリシアの走者の力を評価する手段や、今日の走者とギリシアの走者を比較する手段はないけれど、短距離走者か兎を追いかけて捕えたとか、長距離走者がコロネアからテーベまで馬と競走して勝ったとか、様々なことが伝えられている。ヘロドトスはアテネからスパルタまで2日間で約100kmの距離を走ったフィデピデスについて語っているし、また彼がマラトンからアテネまで駆けつけて勝利の一報を伝えるや倒れたという故事にならって、古代人には知られていなかった近代マラソン競走が純近代的な競技種目として行なわれているように、持久力を語った色々な偉業が記録されて伝えられている。これらはすべて非常に漠然としていて、比較の対照にはならないけれど、この少ない手掛りから、一般にギリシア人は競走、特に長距離競走に於いて高い水準にあったと推定する以外にない。

武装競走 *Hoplite* はBC 6世紀末頃から行なわれているが、これは厳密に言えば、軍事訓練であり、その導入は競技に重きが置かれ、実践的な性格を失ないかけてきたので、それを競技に復活させようとしたもので、軍人というよりも、むしろ市民的な兵士全体に参加を求めた競技種目である。今日の軍隊で行なわれている銃剣競技のように障害物競走や武装競走は軍事的活動に役立ち、しかも非常に人気があり、その鮮やかさはギリシアの壺絵画家達に好まれた題材の一つである。

この種目は身につける装備や規則、距離が様々で変化に富み、オリンピアやアテネ

では2スターデの往復競走で、ネメアでは4スターデの競走であった。⁽¹⁾ アテネでは胄⁽²⁾と脛当、円楯を持って走ることが規則になっていて、25人分の武装が用意されていた。最も長い距離の競走はプラタエアで行なわれたもので、15スターデ、約3,000m位の競走で、走者は完全武装ということになっていた。この競走はBC 479年にプラタエアでペルシア人を打破った大勝利を記念して行なわれたもので、出発点は競技場の外の戦場に立つ戦勝記念碑であった。⁽³⁾ 伝説によると、過去の優勝者が出場して優勝できなかった場合は殺されるということで、2回優勝することは誰にも認められなかった。優勝者は当然の報酬として「最良のギリシア人」⁽⁴⁾と宣言された。常に走者は兜と脛当を装備し、楯を持っているが、脛当の着用はBC 450年頃から途切れている。ベルリン博物館所蔵の赤絵杯(第9図)にはそのレースの模様が描かれている。右側の走者は既に説明した姿勢でスタートの位置に付き、左側の走者はちょうど折返点に達して回ろうとしている。真中の第3番目の走者は折返点を回り終えて、ちょうど引き返そうとしている。下の3人の走者は全速力で走っているようであり、その中の1人は許せない罪を犯して周囲を見ているから、恐らく真中の走者が優勝者であろう。そうであれば、彼のそのような姿勢は免じられる。

この人気のあった競技を描いたものの中で真面目なものと思えない変形物がいくつも見受けられる。例えば、前方に乗り出して右手で体を支え、スタートの位置に付いている武装の走者を第10図に見るが、バランスを失ったのか、あるいは実際にスタートの位置に付いているのか、また袋競走や障害物競走の競技者がちょうどクラウチング・スタートを使うようにこの不格好な姿勢でスタートをしなければならないという規則が偶然にもあったのか、とにかく、この絵はギリシアの走者がクラウチング・スタート法を使ったという学説に対してわずかな証拠を提供している。第11図には前に楯を持った走者と楯を持たないで走っている競技者が描かれているが、これは走者が第1周目には楯を持ち、第2周目には楯を置いて走った競走を示唆するものである。しかし、これはもちろん単なる想像に過ぎない。

競技場の外に出て走った競走の例はほとんど記録されていないが、既に述べたプラタエアの武装競走の外にギリシア式のリレー競走といわれる聖火競走があった。これ

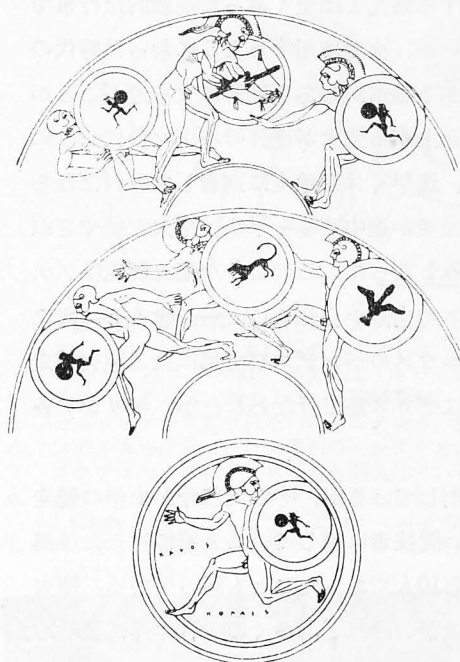
(1) アリストファネス「鳥」291, Pausanias II, 11. 8., Pollux, III. 6.

(2) Pausanias V. 12. 8.

(3) Pausanias IX. 2. 6., Philostratus「Gymnastica」8. プルタルコス「アリスティデース」21. 1.

(4) Revue des etudes anciennes, xxxi, p. 13

この称号はスパルタやその他の所から碑文に刻まれていくつかでているが、L. Robert はプラタエアの競走の勝者にだけ与えられたものと解釈している。



第9図 武装競走

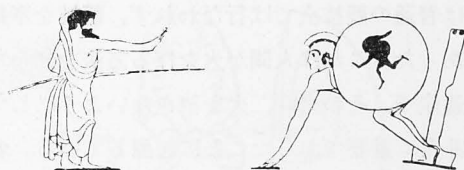
BC 480 年頃のアテッカ赤絵皿 ベルリン博物館、2307 Gerhard「Auserlesene Vasenbilder」261.



第12図 重りを持たない立巾跳

BC 400 年頃のアテッカ赤絵皿混合杯 ルーブル美術館、G. 502.

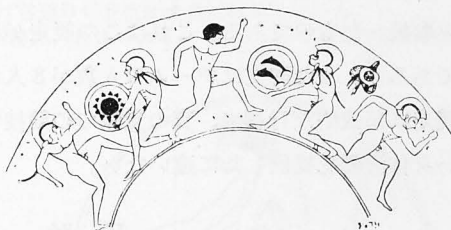
足の位置から恐らく巾跳を示したものであろう。勝利のリボンを手にする女神から、重りを持たない立巾跳の競技があったものと思われるが、それに関しては何も分かっていない。



第10図 武装競走

BC 470 年頃のアテッカ赤絵杯 カルフォルニア・サンシモンのハースト・コレクション蔵

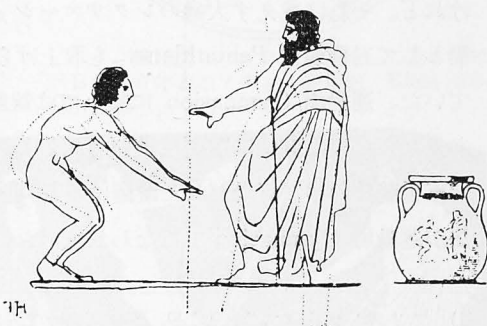
ハウゼル博士はこれをクラウチング・スタートを表わすものと考え、Ridderは体育的運動と見なしているが、武装競走には種々のスタート法があったと考えられる。「Jahrbuch des deutschen Archäologischen Instituts」p. 191. Fig. 16.「Journal of Hellenic Studies」xxiii, p. 285.



第11図 武装競走の練習

BC 6 世紀のアテッカ赤絵皿 ミュヘン美術館 2613.

壁に掛けてあるものから運動場の光景であることが分かる。ここにも珍しい動作が見られる。「Journal of Hellenic Studies」p. 284.



第13図 重りを持たない立巾跳

BC 420 年頃のアテッカ赤絵皿酒壺 ライプシッック美術館、T. 642. 「Jahrbuch des deutschen Archäologischen Instituts」p. 185.

ギリシアの競技

は普通の競技会では行なわれず、競技を奉納する祭礼とは全く違った宗教的な行事であった。これは人間が火を作る方法を知らないが、火を使用するようになった時代の遺産で、その当時、火を消さないようにしてある場所からある場所に火を運ぶことが非常に重要であったことに起源している。燃え上がる聖火が今日のバトンの代わりになり、優勝するには燃え上がる聖火を持って、逸早く目標地点に到着しなければならなかった。特に鳴り響く観衆の拍手によって走者が途中速度を早め、聖火を絶やさぬようにする努力は見物人にとって大きな楽しみとなった。このような聖火競走はアテネの街路で行なわれたことがアリストファネスの文章から知ることができるし、またプラトンは「共和国」の第1ページにペイラエウスのペンデス祭で馬に乗る聖火競走の体験を記述している。⁽²⁾最も有名な聖火競走はデロス島で行なわれたが、ギリシア各地で盛んに行なわれていたようである。

ギリシア各地で聖火競走に関する碑文が出土しているが、その大部分が少年の競走を取扱ったものである。これはこの競走が若い競技者に適していると特に考えた証拠であろう。また碑文はチームの人数が8人から10人であったことも語っている。聖火競走は祭式的な行事で、真の意味での競技ではないけれど、多くの少青年達に素晴らしい身体活動を提供したに違いない。⁽³⁾

II 跳 躍

跳躍⁽⁴⁾は軍事訓練ではない。ホメロスの作品の中ではパエアキア人のレクリエーションの一つとして述べられ、後代になって五種競技 Pentathlon の一つとなっている。我々の知る限りに於いても、大きな祭礼の競技会に単独種目としては存在していないけれど、それは絶えず大衆のレクリエーションとしての人気を持ち、非常に激しい運動として五種競技 Pentathlon にも取上げられ、五種競技の代表種目として考えられていた。運動場 Gymnasion に於いては跳躍重り Halteres が身体訓練に必要であると見なされて、非常に重要な役割を演じていた。

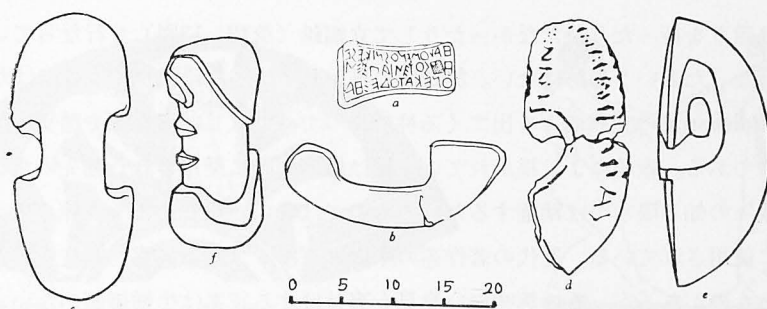
五種競技の中で行なわれた跳躍は重り Halteres を持った走幅跳で、色々な跳躍方法が運動場 Gymnasion で行なわれていたことは疑いない。我々も承知のようにギリ

(1) アリストファネス「蛙」129, 1087. 「蜂」1204

(2) プラトン「共和国」1. 32

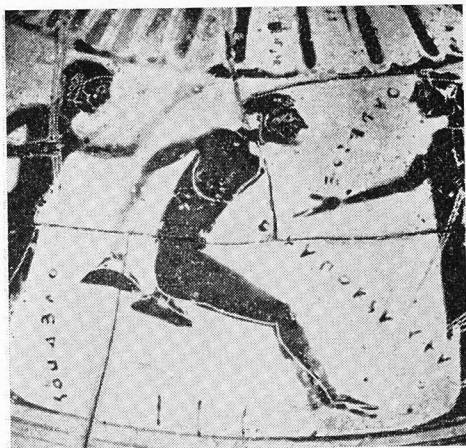
(3) Moretti 「Iscrizioni Agonistiche Greche」 57

(4) E.N. Gardiner. 「Greek Athletic Sports and Festivals」 p. 295
Journal of Hellenic Studies, xxiv, p. 70, 179



第15図 比例尺と比べたハルテレス

- a. エレシウスで発見された鉛のハルテレス、アテネ国立博物館、9075。BC 6世紀のもの、 6.35×3.81 cm、重さ 1.88kg。碑文には「エパイネトスはこれを持って勝を得たり」と刻まれている。
- b. 鉛のハルテレス、対の1つ、英国博物館、長さ21.6cm、握りの巾 3.15cm、重さ約 1kg。
- c. オリンピアで発見された石のハルテレス、長さ 29.2cm、重さ 4.6kg。
- d. スパルタで発見された大理石のハルテレス、長さ 22.8cm、重さ 1.36kg、BC 5世紀、碑文には「アテネのバイチアダスへ」と刻まれている。
- e. 石のハルテレス。コリントで発見された1対のうちの1つ、アテネ国立博物館、 $28.54 \times 10.16 \times 7.62$ cm の大きさ、重さ 2.25kg。c d eの型は普通BC 6世紀の壺に描かれている。
- f. ロードスで発見された石のハルテレス、英国博物館、長さ19cm、これらの型は後代の芸術品に表わされている。



第14図 跳躍のフィニッシュ

BC 6世紀前半のアテッカ黒絵標壺 英国博物館、B. 48.

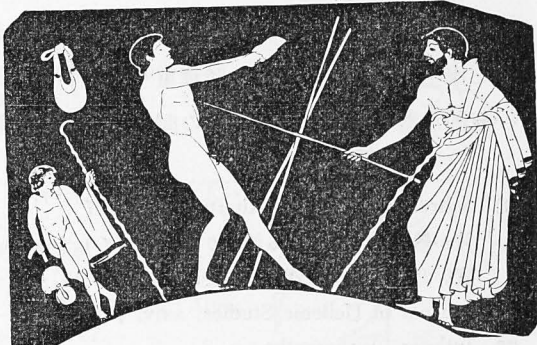


第16図 ハルテレスを持って走る青年

BC 520年頃のアテッカ赤絵皿 Klein「Euphronios」p. 306.

第17図 ハルテレスを振上げる青年
BC 480年頃のアテッカ赤絵杯 ポストン美術館蔵

パレストラで練習している光景で、ハルテレスを持った青年の背後には奴隷の少年が杖、衣類、油壺、海綿を持っている。後方に傾いた姿勢は助走の最後に最終的に振り上げる動作を示している。



ギリシアの競技

シア人は重りを持ったり持たなかったりして立幅跳（第12, 13図）を行なっているが、高跳を行なったという形跡はない。第12図に描かれている柱は跳越すものではなく、体育場 Paleastra の光景によく出てくる柱の一つで、しばしば出発線や踏切に使用されたものである。壺絵によく描かれている棒は練習の時に使用された穂先のない槍であり、我々の知る限りでは跳躍するためのものではない。承知のように棒や槍は乗馬するのに使用されている。近代の著作達の中にはギリシア人が障害物競走を行なったと述べるものがあるが、この興味深い意見を裏付けする証拠は生憎価値がない。⁽¹⁾ギリシアは塙や生垣のない国で、主な障害物といえば、川の流れと溝のようなものである。従って、幅跳の方が優位になり、障害物競走を行なった可能性は少ない。

幅跳のために敷居 Bater と呼ばれる固い頑丈な切板が置かれたが、それは木製であるか、石製であるか分らない。壺絵に見る踏切は地面に槍をさしたり、競走の出発線に使用されたものと同じ柱が用いられているが、恐らく競技場の敷居が跳躍の踏切にも使用されたと思われる。⁽²⁾

踏切の前方の地面を掘り返し、必要な距離の間を平らにし、これをスカンマ Skamma と呼んだ。スカンマ、つまり掘り返した所を飛び越すことは驚くべき偉業として諺に表現されている。55足長（約16m50）という信じ難い跳躍をした英雄ファユルウスはスカンマを5足長（1m50）ほど飛び越したといわれ、その試技で足を痛めたという注釈者の記述も決して不思議ではない。

スカンマの地表は足跡をつけるに十分な程まで柔かくし、跳躍の計測は鞭 Canones を用い、跳躍ごとにペグが地面に置かれて印された。競技者の跳躍を印すペグは第14図の跳躍者の下にはっきりと示されている。古代に於いては競技に覇気と情熱を加えるために地面に鋭い釘を置いたものと解釈される。

ギリシア人は常に跳躍重り Halteres を跳躍に使用した。⁽³⁾これらの跳躍重りはダンベルに少々似たもので、亜鈴の起源ともいうべきものである。重さは1kgから4.5kgまでと様々で、金属または石で出来ている。最も単純な型（第15a図）はエレウシスから出土したBC6世紀の跳躍重りで、少々横側がくぼんだ長方形の平板鉛である。一般的な型（第15b図）は手の握りとなる直線面に半円形に深くくぼみの付いた金属

(1) Schröder 「Sport im Altertum」 p. 107

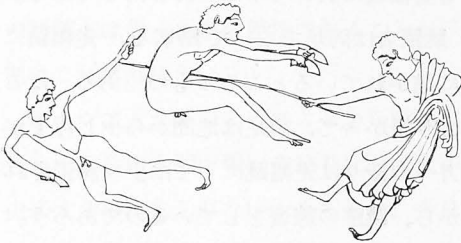
彼が絵図を与えている浮彫りは消失してしまっているが、彼がハードルと考えるものは賞品を置いたテーブル以外のものではない。

(2) Journal of Hellenic Studies, xxiv, p. 71

(3) Juthner 「Jurngerathe」 p. 3



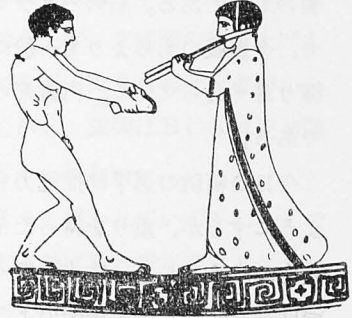
第18図 ハルテレスを振り下ろす青年
ボログナ美術館所蔵の赤絵皿 (BC 480 年頃)
ここではハルテレスを振る練習をしていることがはっきりと示されているが、実際の跳躍の前の振りには姿勢が余りにも低すぎる。同じような場面はニューヨーク・メトロポリタン美術館の No. 06. 1133 の壺にも描かれている。Zannoni 「Scani della certosa」 lxxvii. I.



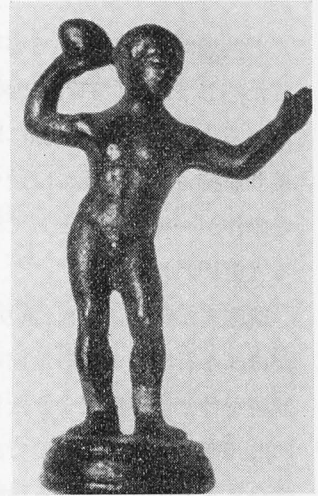
第20図 跳躍者の空間動作
BC 500 年頃のアテッカ赤絵皿 ポストン美術館、01. 8020.
左側の青年は跳躍と結びつかない方法でハルテレスを持って練習している。Beazley 「Attic red figure Vase」 p. 83, Fig. 51.



第22図 石を投げる競技者→
BC 5世紀後期のエトルリアの銅像 ボログナ市民博物館蔵
一般的に親しまれた運動であることは間違いないが、私の知る限りでは石をほうる描写はこれだけである。

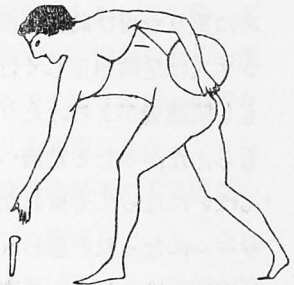


第19図 跳躍者と笛吹き人
BC 440 年頃のアテッカ赤絵酒杯 英国博物館蔵、E. 427.
この姿勢は第17図に続くようである。跳躍者はハルテレスを下方に振っている。Gardiner 「Journal of Hellenic Studies」 xxiv, p. 185.



← 第21図 ハルテレスを振り上げる跳躍者 BC 5世紀頃のエトルリア人の作品
ジウリア美術館蔵 立巾跳を表わした非常に活発な小像である。

第23図 円盤の投てきを印す人→
BC 525 年頃のアテッカ赤絵皿 ザルツブルグ美術館所蔵、467.
青年はマークを印すか、マークを引き抜こうとしている。Juthner 「Antik Turngerathe」 Fig. 27.



ギリシアの競技

製のものである。石のハルテレス（第15c, d, e 図）は、半球体の石で作られたもので、金属製のものよりも一般に重く、両端が尖っているか、円くなっているかして、握り易くなっている。円錐形のもの（第15 f 図）は一般にローマ時代に見られるようである。

今日の幅跳の選手は推進力を走る速度に求めるから、踏切の時に最高速度に達するようにするが、重りを持ったギリシアの跳躍者は推進力をある程度まで重りの振りと走力に求めるから、助走を短く取り、余り早くしない。バネのある小さなストライドで助走を開始し、第16図のように重りを両手に持ち、それをわずかに振りながら走る。踏切に近くなると助走を落とし、長くて緩慢なストライドを2, 3歩取り、前後に1, 2回勢いよく重りを振って、最後の前方の振りで踏切る。

重りを前後に振ることは走幅跳に於いても立幅跳に於いてもほとんど同じであるが、立幅跳では常に両足をぴったりと合わせ、跳躍者は両足でもって踏切る。走幅跳に於いては片足で踏切る。これは一般に壺絵に描かれているところのものである。ほとんど共通に描かれている姿勢はやや後方により掛かって、前足は地面から少し浮上がった感じである（第17, 19図）。第18図の下方への振りは走幅跳にしては少々誇張されているようで、実際に跳躍していないから、跳躍の練習をしているのであろう。重りを持った走幅跳には最も調子の整った周到な動作が必要である。そのため、色々な動作が一種の練習として教えられ、そのリズムを得るのに笛の助奏が伴ったのである（第19図）。

跳躍者が踏切るとき、重りを前方に振り、そのために第20図のように空中で腕と足とがほぼ平行になる。着地前に重りを後方に振り、その運動は前方に足を振り出させて跳躍を伸ばす。同じような目的で今日の跳躍選手は空中で腕を前後にピストンのように2, 3回動かしているのである。第14図は完全なフォームを表わしているが、これらは今日我々が写真で見る跳躍選手のフォームと正に一致しているといえよう。

着地時にギリシアの跳躍者は後方に倒れるのを防ぐために、またバランスを取るために重りを再び前方に振ったにちがいない。フィロストラトスが述べるように、ギリシア人は足跡が正しく付いていなければ跳躍しても計測しなかった。このことから、もし跳躍者がよろけたり倒れたり、また足がバラバラに着地すれば、跳んでも測ってもらえなかったと結論づけられるだろう。今日ではもうそのような規則はなく、四つんばいになっても構わないが、記録よりもフォームを重視したギリシアの跳躍ではフェールになったと思われる。

壺絵に描かれている姿勢は重りを持ったギリシアの跳躍者が一般に走幅跳をしてい

ることを示しているが、第21図に見る活動的な小さい競技者は例外のようである。彼は走幅跳とは思えないような姿勢を取り、頭上高く亜鈴を上げ、立幅跳の振り上げと合致する姿勢を取っている。ハルテレスの大きさと両足をぴったり合わせた姿勢からも走幅跳ではないという結論を引き出せるであろう。しかし、銅像はBC 5世紀初頭のもので、芸術家がただ単に亜鈴運動を表現したとは考えられない。

重りを持たない立幅跳は第13図や他の壺絵にもはっきりと描かれているが、そこでは両足を合わせて膝を曲げ、跳躍するために両手を前方に伸ばした青年を見ることができる。彼の背後か、前方に柱があって、踏切が印されていて、立幅跳であることは確かであるが、高跳であるか、幅跳であるかは決定し難い。私には両足の位置から幅跳であるように思われる。第12図には両手に細長い帯を持ちながら跳躍者の方に向かって飛んでいる勝利の女神像が見られるが、これは明らかに五種競技 Pentathlon の跳躍とは異った型の競技であることが示されている。しかし、立幅跳と思われる証拠はこれ以外にない。

ギリシア人がどのようなことから跳躍重りを使用するようになったかは分らない。恐らく初期の人間が戦いや狩りなどで何かものを持って跳んだり走ったりしたこと由来するのかもしれない。もちろん、今日の競技ではそのようなものを使用していないが、19世紀末期に職業選手達によって演芸場などで行なわれた曲芸ジャンプの演技にしばしば使用され、また走高跳や立高跳、走幅跳や立幅跳にも使用されている。あるドイツの著者は重りを持って走幅跳を行なったとは思えないと述べているが、かつて高跳でアマチュアの選手権保持者となり、その後、職業選手として活躍したジョージ・ロードンが重りを持って跳んだ記録を書いているので、それを二、三紹介しよう。

走幅跳でホワードは1854年にチェスターで8 m 87を跳んでいるが、彼は 2.27kg の亜鈴を使用し、長さ60cm、厚さ7.5cmの踏切板から跳躍している。ロードンは重りと踏切板を使うと少なくとも2 m 40は跳躍距離を伸ばすことができると考えている。高跳でベーカーは1900年6月14日、リーデスで片足踏切によって22m 01を跳躍し、ダービーは1892年1月5日にウォールバーハンプトンで1 m 93を記録したが、この時、ダービーは3.6kgの重りを使用し、3歩の助走を取って両足で踏切り、空中で亜鈴を離して跳んだといわれる。また彼は1900年7月19日、リバプールでやはり3.6kgの重りを使用して、4 m 59の立幅跳の記録を作っている。決して重りを使用しなかったロードンは1 m 65を跳んでダービーの記録に挑んでいるが、その挑戦は足下にも及ばない。

これらの記録は跳躍重りを使用すると十分に利益があることを証明している。今日の跳躍競技で重りを持つことを禁じているのは、これを使用すればよりよく跳躍がで

ギリシアの競技

きるからである。跳躍重りの使用法を述べているロードンの記事から、今日の跳躍選手とギリシアの競技者のフォームの間には密接な類似性があることが分かる。彼は高跳に関して次のように述べている。「競技者は踏切る所から約13mほど離れて走り出し、 $\frac{2}{3}$ の距離は小刻みに早い歩調で走り、ほとんど重りは動かさない。踏切る前の1歩か、2歩は比較的長いゆったりとした歩調を取り、重りをその時に2回振り、その2回目の時に前方にくる」。走幅跳の助走も同じであるが、その主な違いは走高跳では跳躍の時に重りを振り捨て、走幅跳では重りを持ったままである。

しかしながら、跳躍重りの使用はギリシア人に帰するものとは説明できない。最近までギリシア人が特別な功績を持つと主張され、恐らくギリシア人が50足長(約15m)も跳んだと信じられたのであろう。今日の世界記録はアメリカのボストン選手が出した8m33であるが、この記録より2倍も跳んだということは身体的に不可能である。このことから、ギリシアの跳躍は三段跳であったということが示唆され、この示唆が大きな力となって、近代オリンピックに三段跳が加えられた。またその他にギリシアの跳躍は3回続けて跳んだとも想像されている。この3回跳は今日でも北方ギリシアでしばしば行なわれている競技である。しかし、これらの推定を支持する証拠がない。それにギリシアの競技者がスカンマという柔らかい砂地に着地した後で如何にして2度目の跳躍をしたかを理解することは難しい。

この記録は全く伝説的な色彩が強い。「ファユルウスは跳躍に於いて50足長余り5足長も跳んだが、円盤投に於いては100足長に5足長たりなかった」と述べる諷刺詩は古代のギリシア人になんか信じられており、今日でもほぼ完全に残っている。このファユルウスはBC5世紀初頭にデルフィのピチア祭で五種競技 Pentathlon に2回優勝し、競走に1回優勝しているクロトンの有名な競技者である。ヘロドトス、アリストファネス、プルタルコス、パウサニアスなどは彼について述べているが、その伝説的な跳躍に関しては何も語っていない。その諷刺詩はデルフィの彼の像に刻まれていたといわれるが、この像の基台が発掘されたけれど、諷刺詩が刻まれていた形跡はない。またそれだけではなく、諷刺詩が競技種目と同時代のものであるという証拠もない。実際にその諷刺詩はA.D.2世紀以前のものではないけれど、その日付が何時のものであっても、真面目に取扱うほどのものではない。スポーツの物語は誇張され易いことでは札つきであり、スポーツ的な諷刺詩にはそういうものが非常に多い。諷刺詩といっても、それはただ単に韻頭を合わせて、調子よく響かせたものに過ぎないのである。名詩集のページはミロンやラダスなどの有名な競技者の諷刺詩で充されているが、例えば、ミロンはオリンピアで4歳の牛を捕えて、アルチスの森に運んで

殺し、一度に食べてしまったというような具合である。ちょうど義経が船八艘を跳んだというような類である。義経の八艘躍びの功名と同じようにフェュルウスが55足長も跳んだという例は全くあてはまるであろう。

ハルテレスは亜鈴の起源ともいうべきもので、授業などでは跳躍の振りの動作を笛の音に合わせて行ったようである。BC 5 世紀には単に跳躍の運動として行なわれたに過ぎないけれど、第20図に見るように跳躍と結びつかないフォームを取って、ハルテレスを体側に振っている姿をいくつか見ることができる。これによって亜鈴運動に似た運動が行なわれていたと推定できよう。事実、亜鈴によって色々な運動筋を訓練⁽¹⁾するようなことが初期に行なわれていたに違いない。A. D. 2 世紀の医学著書にはこのハルテレス運動は正規の亜鈴運動を組織するまでに発展していることが見られる。最初は腕や肩の力を強める運動として腕の屈伸が行なわれたが、その後、ボクシングなどの腕を使う競技者が突出しの運動に使用したり、あるいは身体の屈伸運動に使用している。これらの運動は主に支肢と胴体を強化するものであるが、ガレノスは体側の筋肉を強める運動として他に述べている。実施者は1 m80ほど離れてハルテレスを置き、その間に立って先ず右手で持ち、それで左手のハルテレスを拾い上げ、次に左手でもって右手にハルテレスを持ちかえて、それを再びもとに戻し、この運動を繰り返し繰り返す。

III 円 盤

円盤、Diskos という語は元来、投げるものを意味していた。投げるものと言っても、手近かなものを投げるのであって、初期の人々には石や木幹、金属塊などが自然の武器として、また力を試す手段として用いられた。こうした単純なものから今日の砲丸投やハンマー投も行なわれている。後代の著者達は「歴史時代の初期に使われた円盤は、我々の使用している青銅の円盤ではなく、石の円盤であった。それ故にこの競技は川床や海岸の水で洗い流された平らな石を投げる試みから起こった」と語っているが、これは余り確かなものではない。確かにオデッセウスはパエアキア人の競技会で石の円盤を投げ、ビボンは頭上越しに大きな石を投げているが、ポリュポエテスがパトロクロスの葬送競技で粗製の鉄塊、Solos を抛っている。ソロス Solos という語は石や金属の塊、丸石を意味し、しばしば後代の詩人達によって円盤 Diskos の同義語として用いられている言葉である。

今日の権威者達は円盤 Diskos と区別してこの重いものをソロス Solos と言っているが、これは正しくない。古代の鋳型は砂で円形のくぼみを作ったもので、これは上

(1) Oribasius, vi. 14, 34

側が平らで、その下側が円く曲った金属塊を作り出した。このよい例はウェイルズ国立博物館にある。このボタン型の金属塊がホメロスのソロスであり、最初の金属製の円盤であった。⁽¹⁾これによって何故ギリシアの著者が円盤の形を扁豆や半月に喩えているかが分かる筈である。カルディフでは14kgから22kgまでの金属塊が発見されているように、ホメロスのソロスは疑いもなく後代の試合で使用された円盤よりも非常に重い。第22図には今日見られるようなフォームで石を投げる競技者像を見るが、ギリシア人は円盤を押し投げたのではなく、遠心力を用いた下手投げの振りによって円盤を投げている。

歴史時代に見られる円盤は円周の方より中心部が少々厚くなっている金属板か、石板である。BC 6世紀の器絵壺には白くて厚目の円盤が見られるが、BC 6世紀の末頃から、より重い金属製の円盤が使われ、BC 5世紀には広く一般的に使用されている。わずかながら石の円盤も使用されているが、その中で細かい資料を取ることのできる標本の一つに、直径、27.5cm、重さ7.7kgと、重さが今日の砲丸とほぼ同じものがある。金属製でこの石の円盤と形がほぼ同じものはA. D. 241年にパブリウス・アスクレピアデスによってオリンピアに奉納された重さ5.7kgの円盤である。金属製の円盤は非常に多く、直径15cm から 22.5cm、重さ1.3kgから4.1kgと、重さや形に於いても相当様々なものが多く発見されている。このようにギリシア世界を通じて、あるいはギリシアの競技史を通じて、形や重さに於いて統一されたものがない。

ここで注目しなければならないことは重さが違ったことである。重さが違ったということは、軽いものは大人よりも少年によって使用されたこと、⁽²⁾あるいは色々な祭礼で様々な運動に使用されたことによるものである。石の円盤が競技会で実際に使用されたことはBC 6世紀の碑文から明らかであり、また現存する最も軽い円盤も「エキオイダスがこの銅の円盤でもって高潔なヘパレニア人を征服し、これを偉大なるゼウスの双子に捧げる」と刻まれているから実際の試合に使用されている。

このようにギリシアの円盤投選手達は重さの違った円盤を使用したので、彼らの達し得た水準を考える手段がない。諷刺詩によれば、跳躍で有名なファエウルスは95足長も投げ飛ばしたというし、フィロストラトスはオリンピアで使用している2倍の大きさの円盤を100キュービットも投げたプロテシラウスについて語っている。またス

(1) ブルタルコス「倫理論集」288

(2) パウサニアスは「アイアースのものと思われる巨大な骨がサラミスで発見されその膝蓋骨は少年の円盤のように大きかった」と述べている。

(3) 腕尺のことで、肘から中指の端までの長さをいう。1 Cubit=45cm~55cm。

タチウスはアルフェオス川の向う岸まで円盤を投げたフレギュアスについて述べている。しかし、用いられた円盤の重さが分からないので、これらの記事は価値がない。今日のオリンピック競技では 2 kg の円盤を使用し、今日のフォームで投げた記録は 60m 以上にも達している。ギリシア式の窮屈な投げ方で 1908 年にシェリタンは 28m を投げている。

フィロストラトスの文章の中にはアポロンの投げた円盤で事故死したヒアシンソスを語る箇所がある。その中で彼は「バルビスは小さいけれど、1 人で入るには十分であり、後ろを除いては仕切られている。そこで上体を前方に乗り出して右足で支え、一方の足の体重を取ると同時に、円盤を持つ手を大きく前方に振り、それで下方に振り上げる」と述べている。この記事から、バルビスと呼ばれる所で円盤が投げられたことが分かる。またさらに「投てき者は頭を右側にひねり、身体の右側が見えるまで身をかがめて回し、円盤を投げるためにロープのように引張って、体の右側に力を集中させる」と述べていることから、ミロンの円盤投選手像の姿勢を取ったことも明らかである。

フィロストラトスの文章から、バルビスは前面の線と背後のない両側の線によって仕切られ、投てき者は自分の好きなようにステップを取ることができたことが分かる。当然、競技場ではバルビスと呼ばれる上述の石板線から円盤や槍などを投げたと思われるが、これに対する直接の証拠はない。

投てきはバルビスから円盤や槍の落ちた所まで計測されたが、もちろん、バルビスの線を踏み越してはならない。方向は競技場の広さによって制限され、制限区域以外に落ちた投てきは計測されない。第 23 図には落下地点を印す円盤投の競技者を見るように、円盤の落ちた所にはペグ（木釘）がさされた。

円盤投は今日復活されて行なわれているけれど、今日の投げ方と古代の方法とが非常に異っていることは実際に興味ある問題である。投げ方に関する手掛りの大部分は壺絵、宝物品、硬貨、小像などから入手できるが、特にパチカン市の美術館にある立位の円盤投選手像（第 24 図）とミロンの円盤投選手像（第 25 図）から投げ方を構成することができる。壺絵や硬貨などの小さい記念物を解釈して行く場合、しばしば構造の法則と充すべき空間の形によって芸術家達が影響されたり、空間と題材の種類によって明らかに違ったものになることを記憶しなければならない。さらに円盤投のフォームにはゴルフのスイングと同じように色々なフォームがあり、あらゆる情報を集めても円盤投の描写を一連のものにすることは不可能である。しかし、ある程度の原理はつかむことができる。それはミロンの円盤投選手像 *Diskobolus* の中に具体化されている。ミロンの円盤投選手像が動機になって、宝物品や硬貨、浮彫り細工などにこの

像が再生されているけれど、フィロストラトスやルキアノスはこの像についてほとんど述べていない。フィロストラトスは上に引用したヒヤシンソスの死を語る文章に付加えて「このようにしてアポロンは円盤を投げ、他の競技者にはこんな姿勢を取ることができなかった」と意味ありげに述べているだけである。

ミロンの像は銅製のもので、今日知られているものはその大理石の模刻しかない。これらのあるものは頭を誤って投げる方向に向けて復元したものがある。英国博物館にもそのような模刻があるけれど、頭のついている唯一の模刻から推定すると、頭は右の後方を振り向けている。この後方への振り向きは実際に身体のねじりを助け、頭の静止を保持させて、肩の回転をわずかに止めている。

もう一つ注目すべきことは、左足が後方に引かれて、つま先立ちの特殊な姿勢を取っていることである。この姿勢は今日の批評家から非常に不自然で、実際にこの姿勢を取ることは不可能であると見なされ、現存する模刻のすべては誤っていて、実物以上によく描かれた足を持った像を再生していると論じられている。しかし、裸足であったギリシアの競技者は、我々が靴の影響で足を無力にしているのとは違って、つま先の使用を忘れていない。恐らくギリシア人のつま先は指先のように強かったと思われる。さらにこの特殊な構えに於いて重心は全く右足にあって、左足にほとんど掛かっていないし、また緊張もしていない。その上、左足をつま先立ちした姿勢はBC 5世紀の壺絵⁽¹⁾（第26図）に描かれているし、硬貨にも描かれている。結果的に見ても、後代の模刻家達が自然的でないものに一層困難な足の構えを加える理由がない。ミロンの原像が自然な構えを取っていたと思われるにしても、ミロンは後方の振りと前方の振りの間の動作を表わすように選定されており、そこには「はっきり」したポーズがある。何故「はっきり」というと、ユトナーが示すように、後方に動かし続ける右腕、つまり継続的な動作の中に、静止がない。それに伴う左足は地面よりわずかに離れており、左足の前方運動がこのつま先の引きずりによって実際に始動していることが技術的に指摘されるからである。投てき者は両手で頭の辺まで円盤を上げ、右手で下方と後方に活発な振りを行なうと同時に、頭と全身を右に向ける。前にある右足は全身を回す軸で、左足と左腕は単にバランスを保つだけである。左腕をロープのように張っていることにも注意しよう。固定した軸を中心に身体を回すことはスイングの本質である。力は腕から生じるのではなく、腿上げと身体のスイングから生じるのであり、身体と体重を結びつけることによって生じるのであるから、投てき者は全体重を投げに集中しなければならない。

(1) Schröder 「Archäologischer Anzeiger」 xxxv, 58



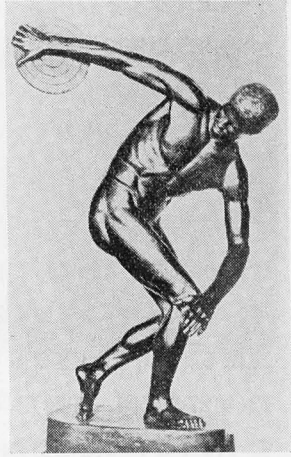
←第24図 円盤投者の立像

BC 400 年頃の銅像を大理石に模刻したもので、ローマ郊外で発見された。バチカン美術館蔵。

頭は古代のものであるが、像に付いていたものでない。右肘と指の大部分は今日の復元で、三分された胴は模刻者の付け加えである。この像の模像に関する論義は Brunn Bruckmann 「Denkmäler」 nos. 682~5, Mustilli 「Il' Museo Mussolini」 pl. 73 を参照。

第25図 ミロンの円盤投選手像→ミロンの作品である銅の原像を大理石に模刻したもの。これはローマのテルメ美術館の胴体とランチェロティ宮殿に保管されている頭を結合させて鑄造したものである。種々の模像に関しては Bruckman, nos. 256, 631, 681.

Sivneking 「Text」 no. 681, Schroder 「Archäogischer Anzeiger」 xxxvii. 641, ランチェロティの模像については Enrico Paribeni 「Bolld' Arte」 pp. 289~92. を参照。円盤投選手像の描写に関しては Bellugue 「Gazette des Beaux—Arts」 ii, p. 69~82 を参照。



第26のa図 円盤を投げる人

BC 480 年頃のアテッカ赤絵皿。ルーブル美術館

これと b 図に於いては右足をミロンの像のようにつま先にポイントを置いている。

第27図 構えと始動左手（の円盤を前方にスイング）

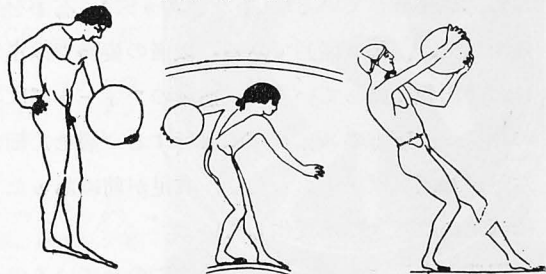
- a. アテッカ赤絵皿の線画 ベルリン博物館、2284.
 - b. 赤絵皿の線画 ミュヘン古代陳列館
 - c. 赤絵皿の線画 ミュヘン古代陳列館
- これらの3つの絵に於いて左足が前方に出ているが、同じ題材を扱ったものでも右足を前方に出したものがある。

(左から a, b, c)



第26のb図 円盤を投げる人

BC 480 年頃の赤絵皿。ローマのギウリア美術館
これらの2つの線画はミロンより前代の画家が円盤の実際的な投てきを表現するために描いたものである。さらにこれ以前に同じ題材に取組んでいるのが、第33図に試みられている。



ギリシアの競技

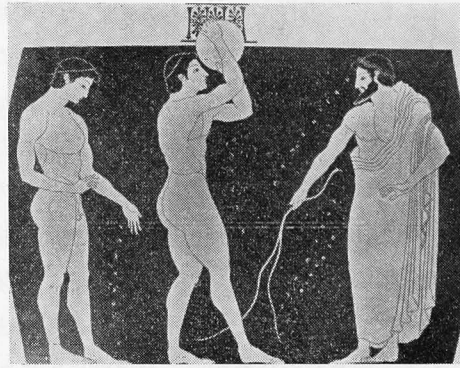
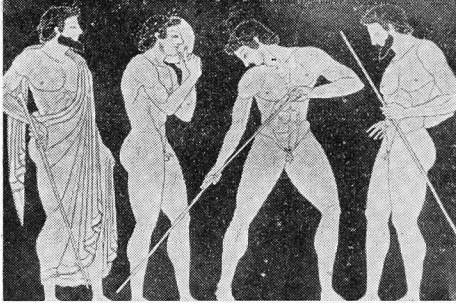
以上が投てきの原理であるが、予備的動作には相当の変化があり、その構えには少なくとも二種類の姿勢があった。その内の一つが立位の円盤投選手像である。この像に対して色々な解釈がなされているが、構えを取った円盤投選手を表わしたものと確信できる。重心は左足にあるが、前の右足を注意してすえつけ、バルビスの線を踏み越さぬように距離を計測するために下方を見つめている。それは今まで主張されてきたように「祈る人」の様子ではなく、行動の「準備をする人」の様子である。投てき者は滑りを防ぐために砂で円盤をこすった後で、左手で円盤を小脇にかかえて構えを取り、左手か、両手で頭の辺まで円盤を振り上げる。そうしないにしても、左手で円盤を振る。両手で円盤を振り上げた姿勢は後方の振りへの始動であり、これは絶えず壺絵(第27のc図、29図)にも描かれている。この姿勢から、左足が前にあれば、足を変えずにミロンの像の姿勢になるまで、右手で後方にスイングを行なう。しかしながら、しばしば円盤投の選手は左足を前に出して両手で円盤を持っている。投てき者は左足を前に出して構えるか、あるいは円盤を上方に振り上げるとき、左足を前にするかのいずれかである(第27のa, b図)。それではミロンの像の姿勢には如何なる手順でそうなるのか。これには左足を1歩前に進めるか、あるいは左足を1歩後に引くかのいずれかが考えられる。前者は1896年にアテネで開催された第1回のオリンピックに於いて競技者が用いた方法で、左足を前に出すことによって投てき者は頭の辺まで両手で円盤を持ち上げ、後に円盤を振る動作のときに、右足を前に出し、投げるときに左足をもう一歩前に進める。この方法は1歩の助走運動によって推進力を助けるか、あるいは投てき者が右足でスタートすれば、3歩になり、この3歩の助走運動によって推進力は助けられる。他の方法は1歩の助走運動によってはじめは右足を前にし、そして右足を後に、振り子のように右足を前後に振って、少なくともゴルフ・クラブの予備的なスイングと同じように身体のスイングに同様な効果を求めるものである。壺絵から推定しても、二通りの方法が行なわれたようである。

銅像や壺絵などには種々の構えが描かれているが、一般に投てき者は円盤を左手で頭の辺に保持しているか(第28、30 a 図)、右手をそろえて左手で頭上に持ち上げているか(第29、30 b 図)である。後者の姿勢では左手の親指を内側にし、他の指を外側にし、円盤を持っているが、前者のフォームでは右手で円盤を持っている。第31 a 図の銅像には下方のスイングに移行する一層せん細な動作が見られるが、この構えでは左足がしばしば前にあったり、右足が前にあったりして、最初のフォームと同じように両足がはっきりと変化している。

円盤を右手に平らに持ち、前腕にのせているのが、後方の振りの特徴である。しか

第28図 構えと始動（左手の円盤を頭の位置に上げる）

BC 6世紀末、フィンチアス作のアテッカ赤絵大壺 ルーブル美術館、F. R. 112.



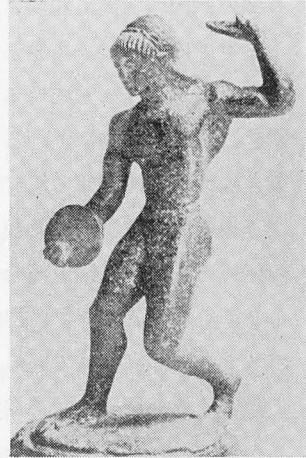
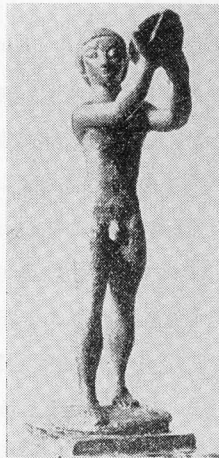
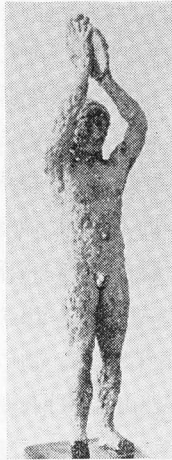
第29図 構えと始動（左手の円盤を右手をそえて頭上へ）

BC 6世紀末、エウチミデス作のアテッカ赤絵大壺 ミュンヘン古代陳列館、2308. F. R. 81.

第30図 構えと予備動作

（29図の構えから出発した連続的な動作）

- a. ペロポネソス半島で発見された銅像（高さ23.5cm）BC 480～470年頃、ニューヨーク・メトロポリタン美術館、07. 286. 87.
- b. ボエオティアで発見された銅像（高さ19cm）BC 480年頃、アテネ国立美術館、no. 7412.



第31図 構えと予備動作 ↗

- a. 下方へのスイングの始動 エトルリアの銅像（高さ16cm）BC 500年頃、英国博物館、675.
- b. 下方へのスイング エトルリアの銅像（高さ7.7cm）BC 500年頃、ロンドンのエスモンド・ダーラッカー・コレクション所蔵

第32図 円盤投者（後方へのスイング）→
BC 500年頃の赤絵杯内側。ボストン美術館、01. 8020.



し、色々な動作が頻繁に描かれ、その動機も非常に様々で、あるものには空間の形を充すために芸術家が芸術的な配慮を施したものもあり、また他のものには色々な振りの動作が描かれている。振りの始動に於いて身体は真直ぐに立つか、またはさらに後方にそるか（第27c図）して、それで身をかがめた姿勢を取る（第32図）が、これらの手順はすべて後方への振りに伴う動作である。その場合、円盤を前腕にのせるように平らにして持ち、腕が足の位置を通り抜けるまで、この姿勢のままである。そして投てきの成功はバランスにあるから、身体のバランスを助けるために左手を横に上げるか、あるいは頭上に上げるかである。またここでも足を交代したと思われる形跡がある。前進した姿勢では左足は常に前にあるが、後方の振りの開始のときにそのようなことをちょうど行なうこともある。しかしながら、常に右足はミロンの像のように身体を回す軸となって前に進める。これは左足の踵が既に上がっているところの第31b図の銅像に明確に説明されている。

ミロンの像について語るルキアノスは「この円盤投選手は投てきするために真直ぐに立ち上がろうとしている」と評しているが、前方への振りを開始するとき、伸筋が働き、右腿を活発に上げることによって全身が真直ぐになる。この瞬間の最も重要な動きはナポリ博物館の汎アテナイの壺（第32図）にはっきりと描かれている。それで少々後の姿勢は英国博物館の壺（第34図）に描かれている。示されている格好はかなりの休息と均衡の構図を好むギリシア芸術の特徴である。しかし、この中には見るには余りにも瞬間的過ぎて、持続するには余りにも不安定過ぎる印象派の構図に似た一種のスナッフ写真を見ているようなものがある。特に汎アテナイの壺に描かれている投てき者は翼を持った女神像を思い起こさせるような姿で地面から浮き上がっている感じがある。しかし、円盤投選手には翼がない。彼は左足を前に出すことによってバランスを素早く取り戻さなければ、地面に倒れてしまうだろう。前に引用した文章の中でフィロストラトスが述べるように「左足は前に振り出さなければならない。それで右手を大きく振る」、そして実際に投てきを行なう左足は離れる（第35図）。つまり右足は体重を支え、左足は自然に地面を離れるのである。

汎アテナイの壺で注目すべきことは円盤を持っている手が外側向きになっていることである。同じような格好はコスの硬貨や他の2、3の壺にも見られ、ここで再び色々なフォームがあることが分かる。同じような投げ方が今日の円盤投にも行なわれていることは注目されるであろう。投てき者の大部分は内側に向けた手で円盤を後ろに振っているが、汎アテナイの壺に見るようにごく少数の者が手を外側に向けて振っているようである。

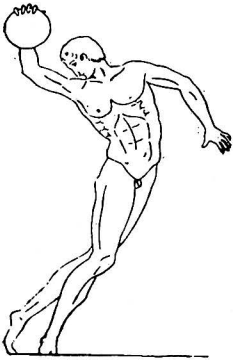
以上の説明を要約すると

1. 構 え
 - a. 左手に円盤を持った立位の円盤投選手の像
 - b. 円盤は手首を平らにして両手で支える
 - c. 円盤を頭の辺に保持する投てき者は一方の足を前にして構え、この姿勢から、足を変えたり、または変えずに円盤を上げる。
2. 両手に円盤を持った姿勢
 - a. 水平に前に伸ばし、
 - b. 頭上に上げ、常に左足は前方にある
3. 左前腕にのせるようにして円盤を下方に振り、もし左足が前方にあるなら、スイングの途中か、スイングの前である。
 - a. 左足を後に引くか、
 - b. または左足を前に出すかである。
4. ミロンの円盤投選手像の姿勢
5. 振りの始めに身体を前に真直ぐに伸ばす
6. 円盤を下方に振りおろすとき、勢いよく左足を前に出す
7. 円盤を手に残したまま、再び右足を前に進める。

これで、現存するミロンの像に示された原理と合致するが、かなりフォームが変化し、せん細になっていることが分かる。そのフォームは本質的に「フリー・スタイル」である。円盤投が19世紀末に復活したとき、種々のフォームが試みられたことから推定できるように、ギリシア人もこの種目には正統な投げ方がないと考えていた。しかし、彼らは「ギリシア・スタイル」というものを生みだしている。フィロストラトスによると、「古代ギリシアの最初の頃の投てきは縦 80 cm、横 70 cm、前方の高さ 15 cm、後方の高さ 5 cm の斜面になった台から行なわれた」というが、この形のバルビスの資料は彼の古い老朽したテキストにのみあるだけで、誤報とも思われる。再び、ミロンの円盤投選手は右足を前に出しているから、投てき者は投げ終わるまで右足を前に置かなければならないことになる。さらに円盤は身体を回さず真直ぐ前後に振るから、常に同じ面にして置かなければならない。今日ではこれらの制限は不適であるから、「ギリシア・スタイル」は自然に消滅してしまっている。

今日のフリー・スタイルでは不幸にもギリシアの投げ方は行なわれなくなり、ハンマー投や砲丸投で使用される経験に基づいている。円盤はサークルから投げられ、円

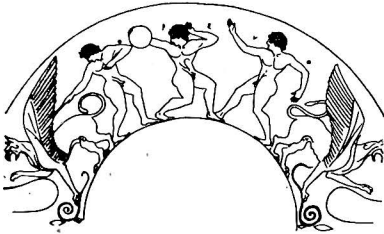
ギリシアの競技



第33図 円盤投
BC 5世紀の汎アテナイ
の黒絵壺 ナポリ美術館蔵
印象派画家は左足が地面
を離れる時の動作をよくと
らえている。これは頭を前
向きにしている第26図から
生じる動作に違いない。
「Journal of Hellenic
Studies」 xxiv, p. 140.



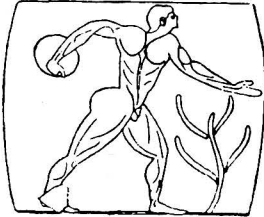
第34図 円盤投者と笛吹き人、トレーナー、
投紐をつける青年
BC 6世紀末のアテッカ赤絵水壺 英国博
物館、E. 164.
この姿勢は32図のものと似ているが、その
後のもので、既に円盤を下方に振り下ろして
いる。



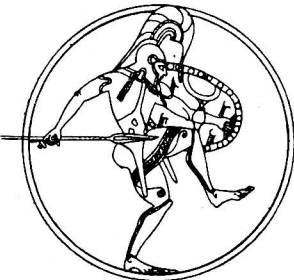
← 第35図 円盤投者と槍投者
BC 6世紀末のアテッカ赤絵皿 ボウログネ公立
美術館蔵
ここでの投てき者は左足を前に出しているが、頭
はまば後方にねじっている。



→ 第36図 円盤の投てき
エトルリア黒絵水壺
(BC 5世紀初頭) ウ
イーン美術館
この姿勢は35図より
少々後のもので右足の
踵が地面より離れてい
る。



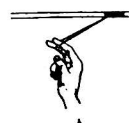
← 第37図 皮紐を締める競技者
BC 520年頃のアテッカ赤絵皿 ザルツブルグ美
術館、469. Juthner「Antik Turngeräthe」 Fig. 37.
第34図と比較参照のこと。



第38図 槍を下手投げする戦士
BC 6世紀前期のアテッカ黒絵皿
英国博物館、B. 380. Journal of
Hellenic Studies」 xxvii, p. 252.



↑ 第39図 槍を投げる狩人
フランコイスの黒絵酒壺
の一部 (BC 560年頃)
フローレンス美術館蔵



第40図 投紐の使
用法
a. b. の投紐
Juthner「Antik
Turngeräthe」
47, 48.
c. 英国博物館所
蔵の壺の断片、
B. 134.
d. ニューカレド
ニアの投紐↓



盤が地面に印された 60° の扇形領域内に落ちなければ測定されない。そのために今日の円盤投では方向が非常に重要である。投てき者は身体のバランスを取るようにして両足を適当に開いて立ち、円盤を右手にしっかりと握って左右前後に 2、3 回振って、左足を素早く回転させ、直接地面に接している右足で投げ、左足を円く振り、身体をサークルの外に出ないようにする。しばしば投げる直前に投てき者はミロンの円盤選手の同じ姿勢を取ることがある。

ギリシアではサークルから投げたという証拠はない。これとは別に、フィロストラトスは「彼らは助走したければ投てき線まで制限助走が認められた⁽¹⁾」と暗にほのめかしているが、ギリシア人は長い助走を取ることを余り好まなかったようである。円盤を投げる基本は円運動で、そのために助走が役立つというよりもむしろ妨げになった。ギリシアの投てき法には足の反転が含まれていたということが壺絵やミロンの像、フィロストラトスの記事から推断できるが、この反転が 1 回転の投げや半回転の投げにまで発展していたかどうか分からない。

IV 槍 投

槍投は今日復活されている競技種目の一つである。長い間、ドイツ、フィンランド、スカンジナビアなどで古くから行なわれていたもので、近代オリンピック競技が復活されてから、アメリカに於いて人気のある競技である。しかし、今日では単に競技的な運動の一形式として行なわれているに過ぎない。ギリシア人やローマ人にとって槍は戦争と狩猟に最も多く使用された武器で、あらゆる少年達はその使用法を学んでいる。アテネのエフェボイは一对の槍を手にして表徴されているように、槍は一般にエフェボイの専用武器である。軽装備隊と騎馬隊の価値が実践化されたペロポネソス戦争の時から、槍投の試合が盛んに行なわれ、槍投の専門的トレーナーがアテネや他の都市国家では雇われるようになった。しかしながら、大きな祭典競技会ではただ五種競技 Pentathlon の単一種目として行なわれていたに過ぎない。

槍は壺絵の中に最も通俗的に描かれているが、真直ぐな棒で、太さは親指大であり、穂先がなく、時々金具のようなものが付いていることもある。クセノフォンが円い鞘⁽²⁾か、球を付けた練習用の槍を騎兵隊の演習に使用することを推奨しているように、金具の鞘は事故を防ぐだけでなく、槍先に必要な重みを与え、槍を正確に飛ばすのに役立っている。穂先のない槍は距離を投げるのに使用され、五種競技 Pentathlon に於

(1) Philostratus 「Imagines」 I. 24. 2

(2) De re equestri, xiii. 10

いて距離を争うものとして行なわれた。穂先の付いた槍は的を当てるために用いられ、その槍が体育場 *Paleastra* や運動場 *Gymnasion* で使用されていたことは、投てき場を横切った少年を誤って殺した青年を弁護するアンチフォンの演説に示されている。⁽¹⁾ 壺絵には馬上からの的を目掛けて投げる姿が描かれているが、これにも常に穂先の付いた槍が使用されている。

競技用の槍は軽い武器で、アメントム *Amentum* と呼ばれる皮の投紐によって投げられた。この皮紐 *Amentum* は長さ 30 cm 位のもので、使用する前に 8 cm から 10 cm ほどの輪を作って槍の柄にしっかりと巻き付け、投てき者はその輪の中に人差指か、人差指と中指を差し込んだ。その輪を巻き付ける所は重心の近くであるが、競技用の槍は穂先の方を軽くするためにほとんど槍柄の真中に巻き、戦争や狩に用いられた槍は穂先を重くするために槍先に比較的近いところに巻き付けた。その位置は恐らく距離を投げるときと、的を当てるときとによって色々と変えたい。重心を投紐 *Amentum* の後方に置くと、正確さはなくなるが、投てき距離をのばした。第37図には槍柄にしっかりと投紐を巻き付けている競技者が見られる。

皮の投紐は運動場で考案されたものでなく、戦争や狩から取入れたものである。第38図には野蛮人達が特に優れた技術を持っていたといわれる一種の下手投の投げ方で槍を投げようとしている完全武装の戦士を見ることができるが、一般に使われた投げ方は上手投で、フランコイスの壺(第39図)に描かれている狩猟場面の絵に示されている。狩人は後方に腕を引き、クセノフォンが推奨する方法で正しく投紐の中に指を差し込んでいる。

この種の皮の投紐 *Amentum* はヨーロッパ全土にわたって広く流布していたようである。⁽²⁾ イタリアでは非常に古くから使用され、エトルリア人、サムニウム人、メッサピア人などによっても使われているが、ポエニー戦争後にローマ軍隊が用いた形跡はない。スペインの武器であるトラグラ *Tragula* は投紐を使って投げるし、カエサル時代に於いてもそれはゴール人の騎馬隊の武器として用いられている。テーネで発見された軽い槍には同じようにして投げたと思われる形跡がある。鉄器時代の初頭にデンマークでは既に投紐を使用していたことが分かっている。ニューダムで発見された槍の柄には紐を固定する鉤があり、鉤と鉤の間には紐を巻く所がある。古い北欧の神話には投紐を付けた槍が述べられているが、それBC 4は世紀にゴールの雇用兵によって北欧に導入されたものであろう。

(1) *Tetrelologia*, ii. 4

(2) *Journal of Hellenistic Studies*, xxvii, p. 255

この固定した投紐はヨーロッパ以外の所で使用されたとは思えないけれど、少々似た仕掛のものは今日、未開民族の間に存在している。ニュー・ヘブリテスやニュー・カレドニアの原住民によって使用されているのが、それである。一方の端には指を差し込む輪と他方の端には槍結びを持つ15cmから20cmほどの長さの太い皮紐である。槍柄の真中近くが突き出ている、そこに槍結びを付け、槍を投げたときに解けて、投紐が残るように紐を巻付けたものである。ニュージーランドに於いては投紐と投棒を混ぜ合わせたものが見られるが、槍の射程をのばすために古くから考案されていたようであり、ギリシア式の槍と共通するものがある。

英国博物館の民族学部⁽¹⁾の線画(第40図)には投紐の働きがはっきりと描かれているが、槍が手から離れるとき、投紐を引くことは槍を半回転させ、ライフル銃の弾のように槍に回転運動を与え、それは槍の射程と貫通力を増強させるだけでなく、槍の方向を維持させるのにも役立っている。投てき者は腕の挺作用を大きくすることによっても射程距離をさらにのばすことができるが、フィロストラトス⁽²⁾が語るように、槍投選手⁽³⁾の指が長いことは非常に投てきに有利であった。

投紐の効果はナポレオン3世が部下の将校に実際にやらせたところ、最初、投紐なしでは20mしか飛ばなかった者が投紐を付けて少し練習させたら、60mも飛ばすようになったということからも分かるし、25m位しか投げられない素人が投紐を使用して65m位にまで記録をのばした実例もある。ある著者は立投げで8インチの投紐を使っ⁽²⁾て実験したところ、距離で4%の伸び、的当てには高い値を得たことを報告している。⁽³⁾

槍の投げ方には槍を水平に持って運ぶものと穂先を上方に向けて助走するものの二通りに区別することができる。前者は戦争や狩の実践的な様式で、的を目掛けて投げるフォームである。兵士や狩人は即座に槍を使う準備を取らなければならないから、肩に担うか、下向に向けて、投紐の輪 Diegkylisnienos に指を差し込んで槍を運んでいる(第41図)。この姿勢から肘を高く上げて槍を頭の辺まで上げ、的をねらう姿勢を取る。それで第42図に示されているように腕を後方に引き、実際に投げるときには逆行の姿勢を取り、一瞬間、投紐によってのみ支えられる槍柄を除いて、同じ姿勢のままで腕と槍を前に進める。

この実践的な様式にはすべて急速な動作と正確に的に当てることが要求されるが、競技的な試合では投てき者は時間を取れるから、投げる瞬間まで頭を常に後方に向け、

(1) Philostratus 「Gymnastica」 31

(2) 岡部平太「陸上競技史」p. 164

(3) H.A. Harris 「Greek Athlete and Athletics」 p. 94

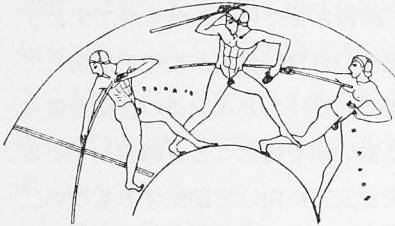
ギリシアの競技



第43図 槍投者

BC 490 年頃のアテッカ赤絵皿 ミュヘン古代陳列館、2667.

右側の青年の姿勢は、左側の青年より後の動作である。真中の絵は分かりにくい。絵が誤っていないとすると、投げる前に槍を全く逆方向にしなければならぬ。



第44図 槍投者

BC 480 年頃のアテッカ赤絵皿 トルロニア美術館、270 (148)

手を外側にひねっていることに注意。 Juthner Antik Turngerathe] Fig. 40.



←第41図 五種競技

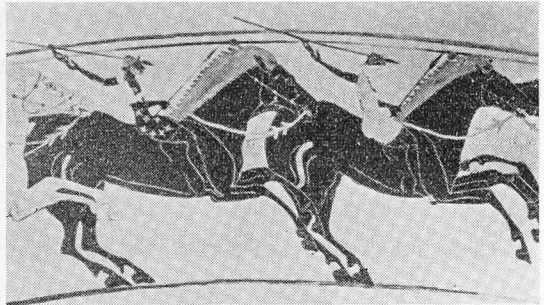
BC 525 年頃の汎アテナイ黒絵壺、英国博物館、B.134. 跳躍者、円盤投者、2 人の槍投者。

先頭の槍投者は距離を投げ飛ばす槍を持ち、もう一方は標的をねらう姿勢を取っている。

第42図 投紐のついた槍を投げる騎兵隊

BC 520 年頃のアテッカ黒絵皿 アテネアクロポリス美術館所蔵

槍をちょうど投げる所で、投紐だけが手にかかっている。↓



第45図 逆行の姿勢をとった競技者

BC 480 年頃のアテッカ赤絵皿 Juthner「Antik Turngerathe」 Fig. 43.



第46図 槍の投紐を調整する競技者

BC 6 世紀末のアテッカ赤絵杯 ボストン美術館、01. 8019.

恐らく槍投の指導を受ける
↓ 準備をしているのであろう。



目を投紐の手にすえる(第43, 44, 45図)。戦争や狩猟、または的を射る姿勢では不合理なフォームを取ることからも、この投げ方の競技的な性格は全く明確である。

第46図には投紐 Amentum を丹念に調節したり、調べたりした後、輪に指を差し込み、投てき者は十分に右腕を後に引きのばすと同時に、左手でもって槍端を持ち、固く結んだ紐を引きのばすために3つの動作が明確に示されているが、頭の位置から推定すると、助走は数歩の短いものでしかなかったことが明らかである。投げる直前に身体をなおい層ねじって、左足を曲げて左肩を下げると同時に、手を外側にねじるから、柄は手の掌にのせるようになる(第44図)。この身体のみねりは今日の競技者が逆行 Revers と呼ぶところのもので、右足は左足の前に置き、上体は逆の位置となり、投てきは右足で行なう。この動作の開始は第45図に見られる。

この種目に於いて今日の競技者と、これらの説明を比較すると、古代のフォームと今日のフォームにはお互いに似かよった点がある。主な違いは投紐 Amentum を使うことである。投紐を使わない今日の競技者は右手を見るために頭を右にねじることは必要でない。そのために助走を長く取ることができる。

古くから槍は戦争や狩猟のために馬上で使用されていたことが文献や芸術品の中に描かれている。プラトンはテミストクレスが馬上に立って槍を投げることを教えたとい(1)い、有用な技として馬上から槍を投げることを奨めている。クセノフォンは騎馬隊の指揮官の義務を扱った小論の中で槍投を奨め、その技の指導記事を十分に書き著わしている。(2)アテネではBC 5世紀頃からこの種目が競技会で行なわれ、汎アテナイの競技会の優勝者には油壺5個が与えられ、2位の者には油壺1個が授与された。テッサリーをはじめ、ギリシア各地に於いて同様な競技が行なわれている。第47図にはこの種目の競技会の模様が描かれている。楯は中心に葉冠の付いた的として置かれているが、恐らくそれは雄牛の目として役立ったものであろう。完全に着飾ったエフェボイが馬を走らせて、その的を通る時に槍を投げるという競技であるが、その得点の方法については何も分かっていない。また徒歩の的当競技も行なわれたようであるが、何も分らない。

V 五 種 競 技

(1) 五種競技 Pentathlon は競走、跳躍、円盤投、槍投、レスリングの5つの種目を組

(1) Menon, 93. Leges, 834

(2) Hipparch, id de re equestri, viii. 10

ギリシアの競技

合わせたものである。リンデル・スコットの古典辞書の中には元来ボクシングが五種競技の1つであったと昔から反証をあげている時代遅れの考え方が今なお見られるけれど、これらの5つの種目が絶対に確かなものと見なされているのは1つの事実である。これらの5つの種目は全ギリシア人の身体訓練の代表的なもので、五種競技者 Pentathlete はそのトレーニングの典型的な産物である。彼らは主要な種目に於いては専門競技者より劣ったけれど、一般的な発達に於いては専門競技者より優れ、力と動きを調和的に結合させて、完全な身体美を生みだしていた。この五種競技者の美は当時誇張されて一方に偏した発達をすべて非難したアリストテレスやプラトンなどの思想家達から絶大な賛美を得ている。⁽²⁾

混成競技は明らかにそれを構成する種目より後になって出来たものである。五種競技はホメロスには知られていないが、BC 508 年、オリンピア競技のプログラムに加えられている。このことは BC 8 世紀に於いてギリシア競技が既に高度な発達を遂げていたという有力な証拠となる。もちろん、こうした競技の概念から緩急軽重の運動をよく調和した運動理論が抽象的に創作されたと考えるべきではない。五種競技は個別な競技として始められたのではなく、競技会の優勝者の中で最優秀の万能競技者を決定する手段で、一種の競技選手権として始められた可能性が強い。

競技種目の順序と優勝者を決定する方法は際限のない論争を引き起こしているけれど、順序に関して明確に分かることは、レスリンが一番最後の種目であったことだけである。種目を掲げている色々な文章を比較すると、競技が最初で、その後、五種競技特有の種目である跳躍、円盤投、槍投の3つの種目が来ている。汎アテナイの競技会の五種競技で与えられた賞品の壺には常にこれらの3つの種目の何かが描かれており、跳躍、槍投、円盤投は五種競技の代表種目であったことは間違いない。五種競技の優勝者を決定する方法に関しては色々な理論があるが、それらの多くは全く実際のでないから、ここでは論じない。ここではフィンランドの競技者であるキャプテン・ピーカラによって示唆されたものを修正して説明しよう。

五種競技者は5種目すべてに勝たなければ賞が与えられなかったというヘルマンの⁽³⁾古臭い考え方はやがて忘れられるようになるだろう。賞を与えられなかったことはほとんどないから、5種目のすべてに勝たなければならないということは、实际的でな

(1) Greek Athletics, p. 358

Journal of Hellenistic Studies, xxiii, p. 54

(2) Aristoteles 「Rhetoric」 i. 5, Platon 「Amatores」 135

(3) Boetticher 「Olympia」 115

い。また3種目に勝てば優勝の資格を得たという実証的な証拠と、それは矛盾する。これは「テサメノスがレスリングに出るまでオリンピアの勝利を得られると思ったが、アンドロスのヒエロニモスが相手となって現われ、ついに勝つことはできなかった」と語るヘロドトスの文章から明らかである。またパウサニアスは「チサノメノスは2種目に於いて勝ち、彼はヒエロニモスより競走と跳躍に優れていたが、レスリングで彼に負けたから優勝できなかった」という説明を与えている。この解釈は明らかである。つまり、チサメノスが2種目に勝ったが、残りの試合に負けたか、さもなければ、文字的な意味から推し進めると「レスリングの1本勝負」と与えられているから、チサメノスが勝利の1本勝負にまで持ち込んだのかもしれない。また彼らがそれぞれ2種目に勝ち、各々がレスリングに於いて一勝負ずつ勝ちを得、ちょうど我々がゴルフの試合に1パットで勝利を決すると同じように、最後の1勝負によって優勝が決定されたものであろう。

このように3種目に勝てば優勝の資格を得て、五種競技の優勝者は一般に三重勝者 Traiakter として考えられた形跡はあるが、1人の競技者が3種目を絶対に制覇できないということが明らかに起こったに違いない。これについてはフィロストラトスの文章の中に五種競技の神話的な起源が述べられている。⁽³⁾

ヤーソンの時代以前には跳躍、円盤投、槍投は独立した種目で、それぞれ葉冠が与えられていたが、アルゴスの航海の時にテラモンは円盤投に勝ち、槍投にはリュンセウス、競走と跳躍にはボレアスの息子が第1位になり、ペレウスはこれらの種目に第2位であった。しかし、レスリングではすべての者より優れていた。それで誰が勇者であるか分からないので、レムノスで競技会が行なわれたとき、ヤーソンが五種競技を提案した結果、それが採用されて、ペレウスが全体の優勝者になった。

ペレウスはレスリングだけに第1位であったが、他の4種目に於いて第2位であったから、総合勝者の賞が授与されたのである。彼は4種目に負けているというより、3種目に於いて3人の相手に負けているのであり、各個人でもって比較すると実際には三重勝者となるのである。ここで彼の同僚者達の成績を比較すると明確な手掛りが得られる。

各競技者の個人的な成績を比較することは簡単な順位表を作っても容易に解決されるが、2つの難点が生じている。第1に、結果がしばしば決定できないことがある。

(1) Herodotus, ix. 23

(2) Pausanias, iii. 11. 6

(3) Philostratus 「Gymnastica」 3

ギリシアの競技

例えば、3種目に於いてAがBを負かし、BはCに勝って、CがAを負かすことが起こり得るのである。第2に、レスリングの順位を決定することは、人数が非常に多い場合に困難である。しかしながら、4種目のそれぞれの勝者だけが最後のレスリングに出場することが許されたと推論できる資料がある。クセノフォン⁽¹⁾はエリス人が競技会の主宰権を強奪したアルカデア人を攻撃したBC 364年のオリンピア競技時の戦いを記述している中で「彼らは競馬競走と五種競技のトラック種目を終えて、レスリングにまで進んだ人達が走路でなくして、走路と祭壇の間でレスリングをしていた」と述べているが、競技場の走路 Dromos で行なわれた種目は競走、跳躍、円盤投、槍投の4種目であるという箇所は一般的な見解と一致しているし、「レスリングにまで進んだ人達」という言葉から、唯一の結論として何人かの競技者が取り除かれたということが考えられる。

こうした予選は簡単に実施され、4種目で各競技者の成績が他の人達のものと全体的に比較され、3種目の中の何かの種目で誰かに負けていたら失格した。1人の競技者が実際に4種目の中で3種目に勝てば、そのまま残って優勝者になったと思われる。また2種目に勝ってもそのまま残り、一般的な可能性から見て、3人の競技者か、4人の競技者の間で優勝者が決定された。結果的には常に2人から4人の競技者が残るようになっていて、その中で誰かに二負していれば失格となった。全員で行なわれた可能性もあるが、その可能性はきわめて少ない。それでこれらの人達の間でレスリングが行なわれ、その勝者が五種競技の優勝者になり、3種目に於いて相手を負かしているから、実際に三重勝者 Triakter である。I, II, III, IVの種目に於いてABCDEFの6人の競技者が争ったと仮定して、その成績順序を次のような表にすると、概要が実際にはっきりするだろう。

	I	II	III	IV
1	A	B	C	D
2	E	A	B	F
3	B	D	E	C
4	C	E	A	A
5	F	C	D	B
6	D	F	F	E

(1) Xenophon 「Hellenica」 vii. 4. 29

Aと他の5人を比較すると、彼の成績は A_2-B_2 , A_2-C_2 , A_3-D_1 , A_3-E_1 , A_3-F_1 となり、DEFは除外され、Bは2種目に於いてCに勝ち、2種目に於いて負けているから、ABCは3種目に於いて2勝以上はしていない。これらの3人はすべて同率となり、レスリングを行なう資格を持つということになる。これが五種競技の判定法であるということは実際に証明できないが、色々な資料の条件をすべて充たすものであるから、ほぼ正確なものとして安心して受け取れるであろう。

VI レ ス リ ン グ

レスリングはあらゆるスポーツの中で最も古くから広範囲に分布していた競技である。パレストラ Palestra という語はレスリングの学校を意味し、ギリシア人の生活に於けるその重要性を示している。ギリシアの文献の中にはレスリングからの陰喩が多くあり、レスリング場の光景は単に競技わざとして描かれているだけでなく、神話の題材にもなっている。通例、パレストラの庇護者として表わされているヘラクレスは巨人アンタエウスと闘っているだけでなく、怪人アケロウスやトリトン、ネメアのライオンなどとレスリングをしている。技術的に評判の高いレスリングの創始者テセウスは盗賊ケルキヨンとレスリングをしているところが芸術作品の中に表わされている。硬貨にさえ、BC5世紀のアスペンドウスの硬貨に見られるように、レスリングの場面が刻み込まれ、それは帝政時代にまで存在していた。

ギリシア人にとってレスリングはわざと芸術であったから、彼らは優雅さとフォームを最も重要なものとしてレスリングに附着させていた。そのため、相手をただ投げただけでは不十分であり、きれいなフォームで相手を優雅に投げなければならなかった。それで競技がプロフェッショナリズムに頹廃し残虐性によってスポーツの最も高潔なものがしばしば汚された時でさえも、レスリングはその残虐性から免れたものを多く残している。パウサニアスは指を折って相手を打ち負かしたシシリイのレスラーの例をあげて、そうした策略を非難し、相手を投げる方法を知らない⁽¹⁾と意義ある注釈をつけている。

レスリング、ボクシング、パンクラチオンの試合は今日のトーナメント方式と同じ方法で行なわれ、一対になったアルファベットの頭文字を印した籤が兎の中に投げ込まれ、各競技者はその一つを引く。⁽²⁾ 競技者の数が奇数であれば、その中の1人が不戦勝になった。これは当然、わずかな利益を競技者に与えたが、不戦勝なくして試合に

(1) Pausanias, vi. 4. 2

(2) Lucianos 「Hermotim」 39

ギリシアの競技

勝つことはより一層の名誉と見なされた。⁽¹⁾

ギリシアのレスリングは2つの型に分類される。1つは立技のレスリング Orthe-pale と呼ばれ、いわゆる正規のレスリング Stadaia-pale で地面に相手を投げつけることが目的である。もう1つは寝技のレスリング Kylisis で、格闘する者のどちらかが負けを認めるまで地面で闘い続けるものである。前者は五種競技及びレスリング競技に認められた唯一のレスリングであり、後者は打ったり蹴ったりすることまで許されたパンクラチオン以外の競技としては存在していない。

体育場 Paleastra に於いて両方の型が行なわれ、そのために別々の場所があてがわれている。寝技のレスリングは普通、有蓋の場所で行なわれ、レスリング場は泥になるまで水⁽²⁾をかけた。泥は身体をつるつる滑べらせて、掴みずらくさせたけれど、泥の中で転り回することは皮膚に有益であるとギリシア人は考えていた。正規のレスリングは丹念に掘り返した平らな砂地で行なわれたので、レスリング場はスカンマと呼ばれ、跳躍の砂場に使用された語と同じである。

ギリシアのレスリングを論じる場合に、多くの著者がそうであるように誤った解釈をしないように注意しなければならない。今日のレスラーの中では曖昧にレスリングの型⁽³⁾をグレコ・ローマンという誤った語を使用しているが、これらはほとんど役に立たない人為的な体系であり、今日の偉大な権威者が注目するように、それは雄大で実用的な運動を評判悪くするために特別に工夫されたもので、それに類似するものはギリシアのレスリングやパンクラチオンにも全然見当たらないし、グレコ・ローマンがあったことを正当化するものは何もない。

ギリシアのレスリング規則に関しては、明確な手掛りがないけれど、断片的なわずかな文献や芸術品からその糸口を掴むことができる。レスリングの型を区別する2つの基本点は規則的には立派に投げることと、性質的にはあらゆる持ち方、組み方が認められたことである。

今日のほとんどのレスリング体系では両肩、片方の肩と腰が地面に同時に触れた時にだけ投げられたものと見なされ、キューバ島やウエストモーランドの型では身体の一部が地面に触れたり膝をついたりすれば投げられたものとされている。日本の相撲は後者に属している。1本を取るにはきれいに投げるか、地面での闘いの結果による

(1) 不戦勝の者を Ephedros と呼び、Anephedros という語は不戦勝なくして勝利を得た題銘に用いられた。(Journal of Hellenic Studies, xxv, p. 17)

(2) Juthener 「Philostratus」 p. 206, 297
Lucianos 「Anacharsis」 2. 28

(3) メゾー 「古代オリンピック競技の歴史」 p. 103

ものである。ギリシアのレスリングでは「立投のレスリング」という名に意味されているように、きれいに投げた時だけ1本と見なされたことは明らかであるが、勝負が地面にまで持ち及んだという形跡はない。さらに背中、両肩、腰が地面に付いた時は立派に1本と見なされたことは明らかであるが、膝が付いた場合に1本となったか、どうかを決めることも困難な問題である。

文献的な資料から正確な解釈はできないけれど、壺絵には膝を沈めて頭上の相手を投げようとする「背負投げ」のレスラーが表わされている。⁽¹⁾ 確証できないが、全体的に見ると、膝を付いても1本とは見なされないと思えるようなところがある。相方とも同時に倒れれば、1本と見なされないということはホメロスのレスリングに関する記述からもその可能性がある。

勝利を得るにはきれいに3本投げなければならなかった⁽²⁾ので、レスリングに優勝を勝ち得る競技用語として「3本勝負」Triassein になるとか、勝者自身を「3本勝者」Triakter として表わしている。

ギリシアのレスラーは相手を投げろるために色々な手段を用いたといわれるが、特に足を取ったり、足を使ったりすることは許されていたであろうかということが問題になる。技術を要するグレコ・ローマン型のレスリングでは足取り、足の使用は禁じられているが、ここではこの禁止技の必要性を論じない。足技はギリシア芸術の中では防禦の手段以外にめったに表わされていないが、ホメロスの時代からルキアノスの時代までの文献をしばしば参照すると、レスリングの非常に合理的な体系としてギリシアのレスリングに重要な役割を演じていたことは疑いない。一方、足取り技が絶対に禁じられていないとしても、めったに使われていないことは確かなようである。プラトンは「法律」⁽³⁾の中で足を持ったり蹴ったりすることが認められたパンクラチオンの方法と立技のレスリングを対照させているが、彼によれば、前者は理想的な状態を生みださせる唯一のレスリングで、「首、手、体側の縫れを解くもの」と定義されている。これはレスリングの技術を真に理解させる明確な定義である。壺絵からも分かるように、プラトンの定義の中で足取り技が省かれているのは偶然のことではない。パンクラチオンでは格闘者がしばしば相手の足や腿を取っているところが表わされているが、正規のレスリングでは腕取り、首絡み、体の巻き抱えなどがしばしば行なわれていても、

(1) Journal of Hellenic Studies, xxv, p. 20

(2) プラトン「エウデュデモス」277, 「パイドロス」37.256. セネカ「善行論」5章
Philostratus「Gymnastica」11

(3) Platon「Leges」796

ギリシアの競技



←第47図 乗馬による槍投

BC 400年頃の汎アテナイト耳付壺

左側——2人の青年が疾走して槍を投じている。前の青年は既に槍を投げそれが的にささっている。この競技に関してはWolters「Zugriechischen Agonen」を参照。

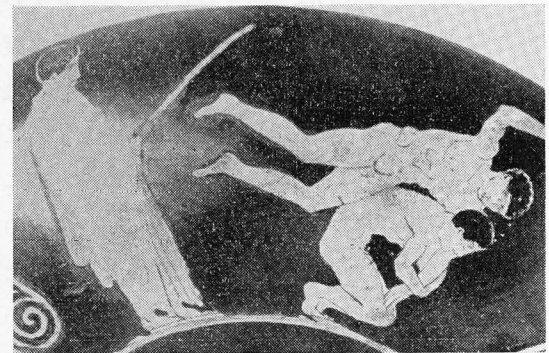
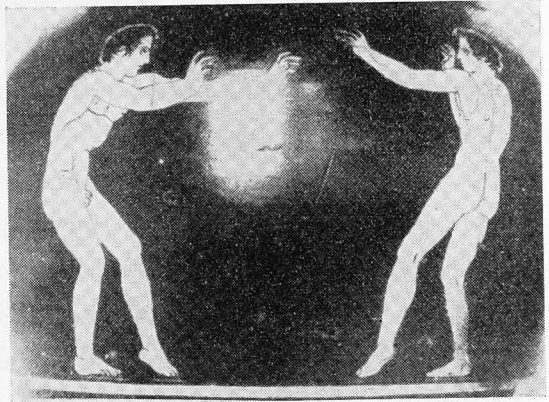
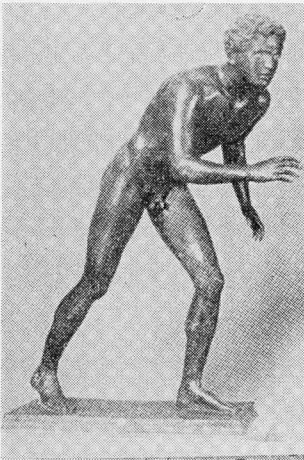
右側——BC 370～360年頃のもの、英国博物館所蔵 B. 612.

第48図 取組む構えをするレスラー

BC 430年頃のアテッカ赤絵壺 クラコウ美術館、1260.

この絵をパンクラチオンであるか、レスリングであるかを定めることは難しい。Beazley「Vases in Poland」pl. XXIX.

第49図 レスリグをする少年
BC 300年頃のギリシア作品を模造したもの ナポリ美術館所蔵の対の一つ。



←第50図 テセウスとケルキヨンのレスリング

BC 430年頃のアテッカ赤絵壺 英国博物館、E. 84.

ケルキヨンは身体を取ろうとして飛び込んでいる。テセウスは脇に動いて左手をケルキヨンの胸に差し、腰越しに彼を投げる体勢にある。

↑第51図 背負投

BC 430年頃の赤絵皿 英国博物館、E. 94.

絵は不注意である。相手を投げる姿勢を表わしているとすれば、両膝を曲げたレスラーの格好はほとんどできるものではない。恐らく空間の関係から両膝の曲げは誇張されたものであろう。

決して足取り技を見ることができない。可能性としてこれは、そのような攻撃法が立技のレスリングの状態では危険であるから、直接に禁じていた結果であろう。相手の足を取るために身を低く屈めるレスラーが足を取りそこねた場合、彼自身投げられることは確実である。これに反して、レスラー達が攻撃にせよ、防禦にせよ、お互いに足を取ろうとかみ合った時、実際的な趣旨と反するものになる。

ギリシアのレスリングの状況を次のように要約することができる。

1. もしレスラーが腰、背、肩などの上体の一部が地面に付けば、それは明らかに1本となる。
2. 相方とも一緒に倒れた場合、勝負と見なされない。
3. 勝つには3本取る必要があった。
4. 足掛け技は認められた。
5. 足取り技は実際に禁じられなかったにしても、めったに使用されなかった。

レスリングはきわめて複雑な問題である。ここでギリシア芸術に表わされている基本的な取り方と投げ方の多くをあげることは困難であり、種々に使用されている競技用語をここで論じられないばかりか、それらの用語を解釈することも困難である。⁽¹⁾

組合う前にギリシアのレスラーが用いた格好(第49図)は今日のレスラーと非常によく似ている。両足を少々開いてしっかりと立ち、膝をわずかに曲げ、背と両肩をまゐめて、首を前に出すが、肩の肩甲骨を下に押し絞って開けないようにすると共に、⁽²⁾伸ばした両手は相手が与える隙を取らえる準備を取る。その姿勢はしばしば芸術品の中にも描かれ、特にナポリ美術館所蔵の少年レスラー(第49図)は有名である。

一般にレスラーはお互いに四つに組んで立ち、「家の切妻の極のようにお互いによりかかったり」、「つき棒のようにぶつかり合ったり」、「お互いに相手の肩に頭を乗せ合ったり」して、少々相撲に似た取り方で投げにとりかかる。時々前から組まないでお互いに体側をねじって横から組合うこと *parathesis* (第50図) もある。

都合のよい差しを取ろうとして、レスラー達は時々相手の手首を取ることがあるが、これは相手に首の巻き抱えや体の巻き抱えなどをさせないための防禦手段にもなる。背負投げとして柔道で行なわれる投げ方に導く持ち方は、ルキアノスが「高く引上げる」*Anabastasai eis Ypsos* と述べるものであろう。この投げ方を行なうには、レスラーは両手で相手の腕をとらえ、一方の手は手首を取り、他方の手はちょうど肘の下にあたる前腕を取る。それで素早く相手に背を向けるや、自分の肩から手を引くように

(1) *Journal of Hellenic Studies*, p. 14, 263ff.

(2) *Heliodorus* 「*Aethiop*」 x. 31



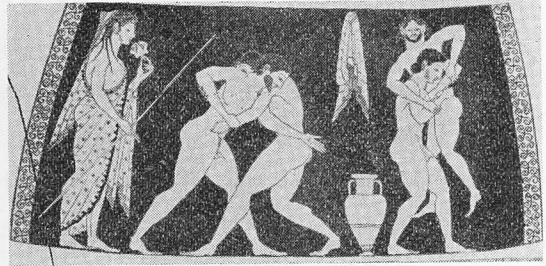
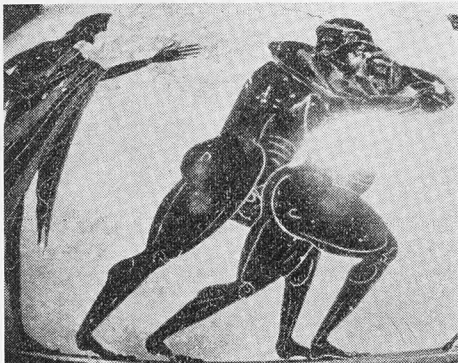
第52図 背負投
BC 500 年頃の赤絵皿 パリ国立博物館、523.

不幸にも画像の線がその解釈を困難にするとともに近代の画家によって復元されている。



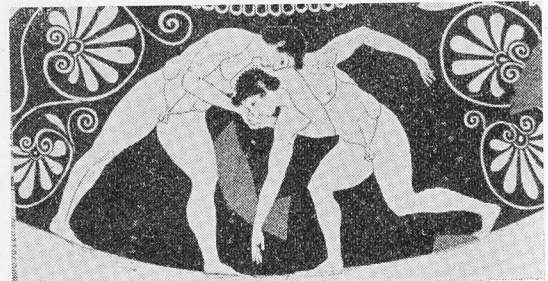
第54図 腰投をするための巻き込み
BC 425 年頃のアテッカ赤絵皿 ローマのギウリア美術館。

左手のレスラーは相手を腰投げすることができるように相手を抱え込んでいる。



第53図 レスリングの練習
BC 530 年頃のアテッカ赤絵壺 ベルリン博物館、2159.

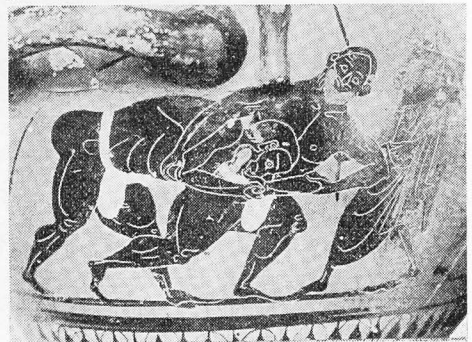
左手の者は青年トレーナーのようである。真中にはひげをはやした競技者が背負投の取り方をしているが、相手は右に動き右手肘下を取って攻撃を阻止している。右側の青年は身体を抱え込んで相手を持ち上げている。持ち上げられた相手は右足を彼のひかがみにびったりと合せながら彼の腕をはずそうとしている。



↑ 第55図 クリュートスを振り回すテセウス
BC 6 世紀末のエウチミデス作、アテッカ赤絵壺
Turin 「Journal of Hellenic Studies」 xxxv, pl. 5.

✓ 第56図 首の巻き込み
BC 6 世紀後半の汎アテナイ黒絵壺 ボウログネ共立美術館、441. 「Greek Athletics」 p. 390.

第57図 首の巻き込みからの投げ パチカン宮殿蔵
これは競技者のほとんどが白の下帯を着用しているところのBC 6 世紀の壺である。ツキディデス (i.6) は「下帯の使用は自分の時代より少し前に廃れてしまった」と述べている。壺絵や芸術品には全裸がギリシア競技の規則になっていたことは立証されているが、BC 6 世紀に下帯をつける試みがなされたのか、あるいはこの時代の風習を述べるツキディデスの記述が正しいのか分からない。



挺を応用し、頭上へきれいに相手を上げると同時に、身体を前に屈めるか、片方の膝を沈めるかして、結果は第51図、第52図に見られるような猛烈に大きい投げとなる。

この投げ方はギリシア芸術の中に始めから終わりの動作に至る説明がなされているだけでなく、この攻撃を報復する色々な方法も示されている。攻撃を受けたレスラーは回転を防ぐために、あいている手で直ぐに相手の脇下の腕を取るか、手首を取って攻撃を防ぐ。第53図には防禦しているところが描かれているが、これは恐らくレスリング学校の授業の場面であろう。ひげをはやしたレスラーが相手の左手首を取っているが、その相手は前方の素早い動作によって左手を使えなくするために、上搏を取ろうとしてちょうど自分の右手を相手の背中の後ろに回して肘の下で右腕を握っている。このような動作は回転するのを防ぎ、腕を締めつけられ、握りを弱めることができる。首の力はレスラーに絶対必要であるから、相手の首をしっかりと掴むことは明らか⁽¹⁾に効果がある。ピンダロス⁽²⁾はレスラーの力と無敵の首について語っているし、アリストファネスの「戦士」の中でデモスがクレオンの押えから逃れるために腸詰売りに首に油を塗るように意見している。首を巻き込むことは Trachelizein という競技術語が用いられ、色々な首の巻き込み方が表わされている。しばしばレスラーは片腕で相手の首を絞めるか、もう一方の手で相手の手首をしっかりと掴むか(第54図)、あるいは首を通り越して相手の脇下で両手を組合わせている。この2つの組み方はネメアのライオンと闘うヘラクレスによっても使用されているし、両手を組合わせる取り方はキューパー島やウエストモーランドのレスラーが使用するものと同じで、手掌と手掌を合わせて指組みができるまで、手を合わせ込んでいる。第55図には首の巻き込みから投げる素晴らしい例がある。テセウスは左手をケルキヨンの肩越しに回して力強く相手をとらえ、片方の手を相手の右脇の下で一方の手と組合わせ、相手を振り回して投げようとしている。

首の巻き込みや体の巻き抱えからの投げ方は相手に向って「腰を回す」edran strephein⁽³⁾としてギリシア人に知られている動作から行なわれた。動作の開始は第54図に示され、さらに第56図、第57図の段階を経るようであるが、それは今日の腰投げと似た投げ方で、明らかに今日と同じようにギリシア人にも熟知されていたものである。テオクリツスはヘラクレスが素早く賢いアルギブのレスラー、ハルパリュクスとあらゆる投げを用いてお互いに投げ合って、彼から腰投げ aro skeleoun edrostrophoi を

(1) Pinderos 「Nemean Ode」 vii. 73

(2) Aristophanes 「Equit」 491

(3) Theophrastus 「Character」 xxvii

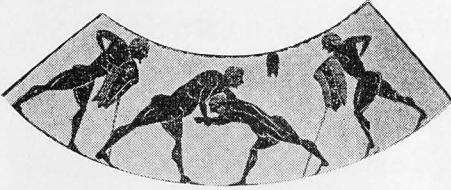
第58図 a 体の抱え込み

BC 6 世紀中頃のアテック黒絵壺 ミュヘン古代陳列館 1468.

前方からの体の抱え込みで危険な例を上手に示している。
「Journal of Hellenic Studies」xxv. pl. 12.



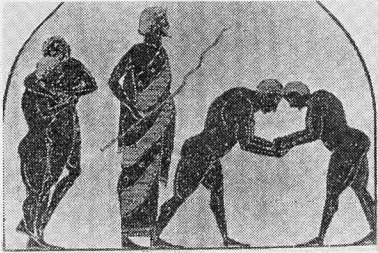
第58図 b 体の抱え込み



第59図 体の巻き抱え

BC 6 世紀中期のアテック黒絵壺 ミュヘン古代陳列館、1461.

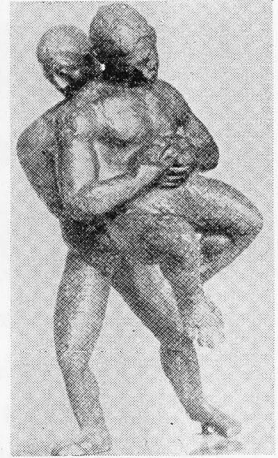
左手の組は背後からの体の巻き抱えを表わしたよい例である。持ち上げられている者は相手の右足の内側に右足を掛けた正規の型で防禦している。



第62図 テセウスとケルキヨン →

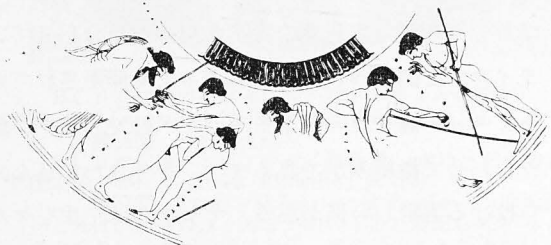
BC 480 年頃のアテック赤絵皿 英国博物館、E. 48.

テセウスは胴を取ってケルキヨンの足が浮くほど振り回している。



第60図 背後より体の巻き抱え

この像の写真は E. P. ウォーレン氏の所有するものであるが、像の所蔵に関して彼自身も言及していない。同じように背後より抱き上げているレスラーの像はいくつか存在している。「Collection Greau」pl. 33. 「Arch. Zeit.」p. 138, no. 14. 「Collection Borelli Bay」257.



第61図 レスリングの授業

BC 6 世紀末のアテック赤絵皿 ボストン美術館、01.8019.

左側はレスリングの指導をするトレーナー、レスラーの一方が両手を伸ばして相手に胴を取らせてトレーナーの指示を持っている。右側は槍投の競技者。「Antik Denkmäler」ii. 20.

学び取ったと述べている。またテオプラストスは「性格」の中で徹底的に学問をして完全に物事を考えたいという研究者を「レスラーが腰投げする格好で浴場を歩き回る」⁽¹⁾と形容している。

最も効果的な取り方は両手で相手の腰を差し押えることである。その体勢から相手を持ち上げて地面に投げつけることができる。腰回りを取ることを *meson exein* は「臀部の上をとらえる」という文句のように相手を容赦なく打ちつける諷的な表現である。体の巻き抱えは前後左右から行なうことができる。

前方からの体の巻き抱え（第53図）は取り口上、困難であるが、巻き抱え込むことができた時は最も効果がある。しかし、無器用で遅鈍であれば、致命的である。レスラーが下手を取ろうと身を屈めたとき、相手の横の動きによって持ち上げられて投げられるか、あるいは相手に上から押し掛けられて地面に伏すようになってしまう。第58図には、これが危険であることがよく説明されている。

さらに同じような体の巻き抱えは第59図と第60図に示されているように背後からも行なわれている。第59図で注目されるのは、持ち上げられているレスラーが相手の膝の後に右足を鍵にかけて防禦しているように、今日のレスラー達が行なうあらゆる手段と防禦を用いていることである。両手も今日行なわれている型で組合わせている。特にこの取り方はヘラクレスとアンタエウスとに關係がある。ローマの詩人は「エアールの息子アテネエウスが地面に触れている限り、常に彼の母親から新鮮な力を授けられた」といい、そのために「ヘラクレスは彼を地上に引上げて地面にたたきつぶした」ということを述べている。しかし、この物語の叙述はギリシアの文献や芸術品には描かれていない。少々疑わしい例は別として、常にヘラクレスは投げつづすためにアテネエウスを持ち上げているのではなく、彼を地面で揺振っているところが描かれている。

このように持ち上げて投げる拠証は余りないが、その持ち方は横側から交叉して背中と身体の下部を取る。これは第61図のレスリング指導の絵の中に説明されている組み方である。それは特にギリシアの芸術家によってテセウスとケルキヨンとに關係づけられる投げ方である。第62図のテセウスはちょうどケルキヨンを地面から持ち上げようとし、ケルキヨンはちょうど一方の足が地面から離れようとしている。ケルキヨンはテセウスと同じようなことをしようとしているが、余りにも遅れ過ぎている。第63図は既に地上に持ち上げられたものであり、テセウスの足を掴むことによって彼の投げからケルキヨンは自分を守ろうとしている。テセウスは逆様の状態に引上げよう

(1) Theophrastus 「Character」 xxvii

ギリシアの競技

としていると同時に、パリにある銅像ではテセウスは全く逆様になった相手を正に投げつけようとしている。投げるところは第64図に示されているが、ここで勝者は背負投げのように膝を沈めていることに注目される。

述べられている組み方の多くは身体の様々な回転と足取りを結合させたもので、これらの2つのものは論じきれない競技用語が色々とある。既に述べたように足取り技はめったにギリシア芸術の中には見られない。これを攻撃に使用している一番よい例は1人のレスラーが相手の股越しに背から引っぱっているデルファイ劇場の群像(第65図)である。また足取り技は後に論じる銅像にも表わされている。これらは形式的にはレスリングの群として類別されているが、レスリングに関する偉大な権威者の1人であるパシー・ロングハルトはいくつかの銅像に示されている格好は立技のレスリングに及ばないこと、また表わされている腕固めの目的は投げるためのものではなく、痛めつけるもので、敗けを認めさせる手段であることを指摘している。従って、これらのものは立技のレスリングではなく、パンクラチオンに属するものでなければならない。

VII ボクシング

ギリシアのボクシング⁽¹⁾はあらゆる競技の中で特に興味深いものがあり、また非常に有益なものがある。既に地中海世界に流布していたボクシングとギリシアのボクシングの間に何らかの関係を見出だそうとしても非常に難しい。しかし、これは別として、ホメロスの時代からローマ帝国の時代までのその歴史をたどることは文献や芸術品などから十分に探り出すことができる。ホメロスの作品の中では既にボクシングは高度に専門化された技術を持ち、パトロクロスの競技会で競技者は細長い牛皮紐でもって自分の両手を覆うに及んでいる。手を覆ったり、保護するものを使用すれば、必然的に闘う格好がすべて変化するものである。従って、我々が便宜上ギリシアのグローブと呼ぶものの歴史とその発展をたどることはギリシアに於けるボクシングを知る上に好都合のものとなるであろう。

単なる生皮の紐か、柔らかくするために油を塗り付けた皮紐は、ギリシアのボクサー達がホメロスの時代からBC 5世紀末頃まで用いた唯一の保護物である。後代の著者達はその後に現われた一層恐るべき道具と対照して「柔らかいグローブ」 imantes

(1) Journal of Hellenic Studies, xxvi, p. 213

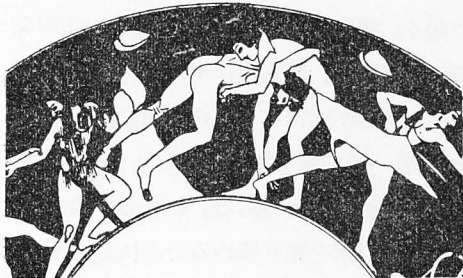
Gardiner 「Greek Athletic Sports and Festival」 p. 402

Jüthner 「Turngeiäthe」 p. 66

第63図 テセウスとケルキヨン

BC 6世紀末のアテッカ赤絵皿 英国博物館
E.36.

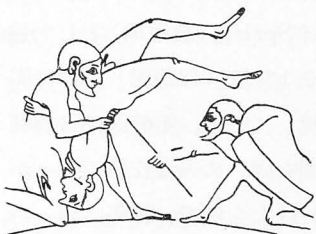
第61図の次の動き。



第64図 胴を取ってからの投げ

BC 6世紀中頃の黒絵壺 フローレンス考古
学博物館、3893.

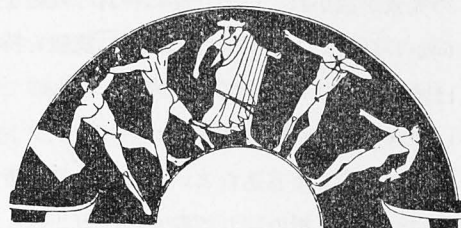
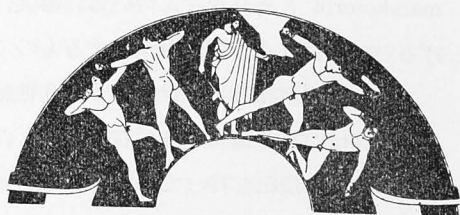
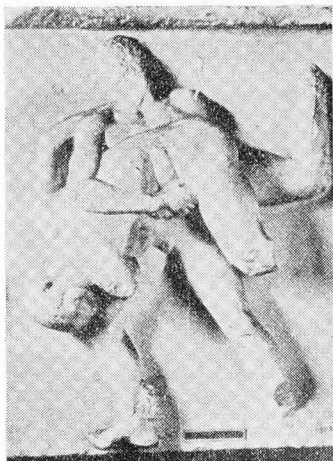
勝者は片方の膝を第54図と同じく地面につけて
いる。



第65図 テセウスとケルキヨン

BC 440年頃のアテネのテセウス
神殿壁面。

第62, 63図のように持ち上げて投
げる素晴らしい例である。



第66図 ボクシングの光景

ドウリス作のアテッカ赤絵皿(BC 490
年頃) 英国博物館、E.39.

上段の右側には倒れたボクサーが右手
を上げて負けを認めている。下段には皮
紐 imantes を付ける準備をするボクサー
がいる。『Journla of Hellenic Studies』
xxvi, pl. 12.

第68図 身を切るような皮紐

ソレント出土のボクサーの大理石像
の右手を線画にしたもの。ナポリ美術
館所蔵。

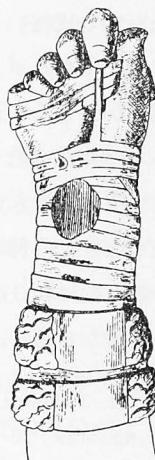
像に関しては Brunn Brückman
614, 615 を参照。



↑第67図 歯で皮紐を
締めるボクサー

BC 336年の汎アテ
ナイ黒絵壺 英国博物
館、B.607.

新しいグローブの導
入年代に関しては
『Journal of Hellenic
Studies』1949, p. 2.
(BC 339年~336年の
間)を参照。



malakoteroi⁽¹⁾ とそれを呼んでいる。事実、それはかなり柔らかいもので、強打を和らげるというよりも指関節を保護するものである。

これらの皮紐はBC 6世紀やBC 5世紀の壺絵に最も通俗的に描かれているもので、それは3 mから3 m 50ほどの長さのものである。第66図に示されている杯の内部には束になった皮紐を持って祭壇の前に立っている青年と、外部にはボクシングの一連の光景が描かれている。手に一対の皮紐を持った青年が同僚に1本の皮紐を差し出し、向かい合った1人が伸ばした手に皮紐を持ち、その一方の端を輪にしているが、この輪は皮紐を結びつけることに関係したものであることが明らかである。これらの柔らかいグローブについて述べるフィロストラトスは4本の指を握り締めるようにしてその指を輪の中に差し込むといっている⁽²⁾。親指は常にむき出しにするけれども、しばしば皮紐を別々に指の回りに巻き付けることもある。概して4本指の指関節の回りに皮紐を何回か巻き付け、手の掌から甲にかけて交叉して手首に巻き、結びつける。しばしば前腕の中程までも巻くことがある。

その後、これらの柔らかい皮紐はプラトンがスパイライ Spairai (装甲球)として述べる⁽³⁾一層恐ろしいグローブによって廃れたようである。プラトンは「理想国」の中で実際の戦闘訓練を緻密に再現するものとしてその使用を推奨している。第67図にこの種のグローブが示されているが、これは4本の指と親指の間を固い丈夫な皮紐でしっかりと巻き、それで前腕にそって柔らかな薄い皮帯を巻き付けたもので、青年はしっかりと巻き付けるために歯で引っばっている。

この複雑な皮紐を巻き付けるようになった原因は、ボクシングそのものがだらだらと退屈したものになり、それでより早く倒すための武器としてスパイライが考案されたのである。「身を切る皮紐」という記述に充当し得るこのグローブはローマのテルメ Therme (温浴場)にあるボクサーの座像やナポリ美術館所蔵のソレント出土のボクサー像(第68図)から十分に知ることができる。これらのグローブは柔らかい皮紐と固い皮の輪からなる非常に恐ろしい武器で、この一撃によって腕が容易に傷つくので、肘または脇の下まで皮帯を巻き付けている。グローブそのものは腕当てみたいなもので、指の付根でなくなり、内側に隙間がある。指関節には輪のずれと衝撃を防ぐ厚い当て物が付いている。輪は幅3 cmと厚さ1.5 cmほどのもので、細長い皮を3枚から5枚ほど束ねた固い丈夫な皮帯で、指関節の所で手首を固定する皮紐によって押えつけ

(1) Pausanias, VIII. 11. 3 Philostratus 「Gymnastica」 10

(2) Philostratus 「Gymnastica」 10

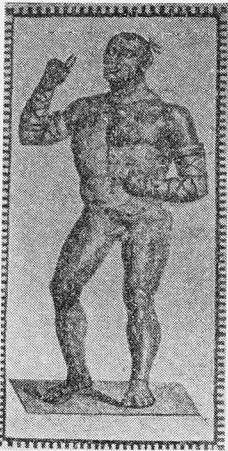
(3) プラント「法律」8章830行。

られている。鋭く突き出た角は強力な攻撃用の武器になった。

この「身を切るようなグローブ」は少なくともA. D. 2世紀まで残っていたけれど、これ以外のグローブがギリシアの祭典競技で使用されたかどうか実際に分からない。ギリシアの著者達は、ローマの詩人が述べる、鉛と鉄の固まりを詰込んだグローブについて何も言及していない。より重く一層危険なものにするために金属を使用したカエスタス Caestus はローマ人が実際に考案したもので、技術的なボクシングを全く野蛮で致命的なものにしてしまった。カエスタスの型取る手は固い球状か、円筒状に皮を巻き、拳の上には、歯のように鋭い釘が2, 3本付いていると同時に、ほとんど肩近くまで套管状に当て物を付けて保護している。この套管状の当て物は普通、なめさない羊毛状の皮を腕の外から内側に回し、それを皮帯で固定したものである(第69, 70図)。

以上、古代ボクシングの歴史を分けると、最初はホメロス時代からBC 5世紀末期までの「柔らかい皮紐の時代」、第2期はBC 4世紀からローマ時代の後期に入るまで続いた「身を切るような皮紐とスパイライの時代」、第3期はローマの「カエスタス時代」に区分することができる。この変化によってボクシングの姿勢と格好は全く変わってしまい、グローブが徐々に恐しい武器となるにつれて、技術的なものがなくなり、一層獣化してしまったことに気付く。

ギリシアのボクシングを理解するのには、どのような条件の下で行なわれたかを知らなければならない。これらの条件はギリシアと今日のボクシングの相違を判断する主な前提になるだろう。第1に、ギリシアのボクシングには正規のリングがなかった。ボクサーは広い場所を有し、相手コーナーに追い込んだり、ロープを利用して闘うということがなかった。これは接近戦を阻止する傾向になり、防禦的で相手の攻撃を待つ戦術を助長した。第2に、ラウンド制がなく、試合は最後まで行なわれ、両者が疲れた時にはお互いの同意で休息を取ったようであるが、一般に一方が第66図や第71図に見られるように片手を上げて敗けを認めるまで行なわれた。またボクサーが倒れても、そのまま打ちつけようとしているから、ダウンした時にカウントを取るという規則がなく、如何なる猶予も与えられなかった。このような試合では無理な戦術を使わないから、未熟で無器用なボクサーは試合が長びくと疲れて不利になった。それ故、審判官がボクサーに注意を与えたと思われるけれど、それにしても試合が長びく傾向にあった。第3に、ギリシア人には体重による組分けが知られておらず、試合の飛び入りは随意であった。このような状況の下では、重量級のものが当然有利になり、その結果、ボクシングは重量級の占有物になって、技術的なものがなくなり、だらだらと試合は進行するようになった。



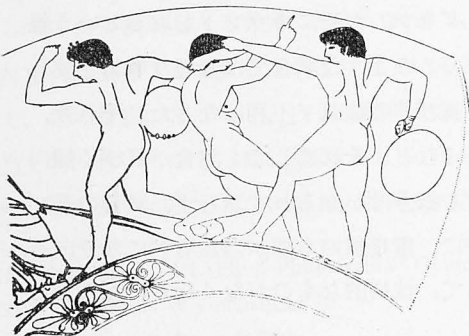
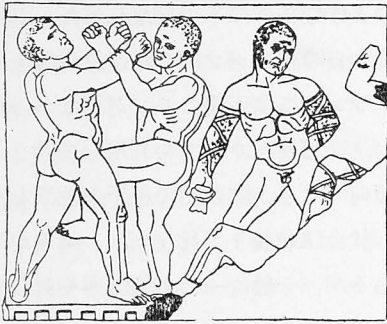
第69図 帝政時代の職業競技者

カラカラ浴場で発見されたモザイク画 ローマのラテン美術館。
この説明画の中には2本の突出した釘の付いた形のカエスタスをはっきりと見ることができる。不体裁なまげcirrusのついた刈り込み頭は職業競技者の特徴である。P. Secchi「Musaico Antomniano」

第70図 ボクサーとパンクラチスト

ローマのラテン寺院の浮彫り、(A. D. 2, 3世紀)

ここでのカエスタスは半円筒状のものとして明示され、その中に手を入れるとちょうど拳の所に鋭く突出したものがくようになっていいる。パンクラチオンの競技が残酷な膝打ちをしている。Juthner「Antik Turngerathe」Fig. 70.



第71図 負けを認める競技者

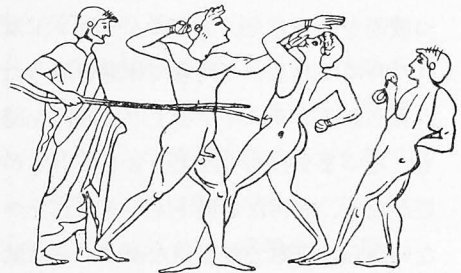
BC 6世紀末のアテッカ黒絵罫壺 英国博物館、B. 271.

第66図のように勝者は倒れた相手を打とうとしているが、ここでの相手は左手を開いて上げている。



第72図 接近戦

BC 6世紀末のアテッカ黒絵鉢 パリ公立博物館、252.



第73図 ひらき手でブローを与えるボクサー

BC 6世紀末の汎アテナイ黒絵壺 レーニングラード、ステファニー庵、76. 「Compte Rendu」, p. 106.

← 第74図 相手を打ち倒すボクサー

BC 6世紀末のアテッカ赤絵皿「Monumentidell' Instituts」xi~xii, pl. 24.

以上が全ギリシアのボクシング史を決定した条件である。

ギリシア・ボクシングのよき時代は第66図の壺絵からも分かるようにBC 6世紀とBC 5世紀である。まず、両手を上げたボクサーの姿勢は素晴らしい。上体と頭がわずかに曲っているのが常で、足を前に向けている。と同時に左足はそれに対してしばしば直角になっているが、これは突込みの体勢に必要な正しい構えである。防禦に使用している右手はほとんど真直ぐに伸び、しばしば手を固く握り締めていることもあるが、時々手を開いていることもある(第72, 73図)。左手は打ち込むために後方に引き、肘はしばしば下がっているが、常に肩の水準よりも上がっている。

左腕を伸ばした半身の構えは頭部の防禦に効果的である。体の左向きは今日のリングでも重要な構えであり、これはギリシアのボクサーの主な特徴である。相手の頭に注意を集中し、ボデー・ブローを使用していないが、ギリシア人がその価値を知らなかったのか、あるいは悪いフォームであると考えたのか、また実際に禁じられていたのか、どうか分からない。事実、フィロストラトスは「スパルタ人はボクシングを男らしい防禦の唯一の型、つまり楯と考えて、ヘルメットを着用しなかったから、ボクシングはスパルタ人によって考案された⁽¹⁾」と述べ、「彼らは頭に一撃を食わないように、そして顔を剛毅にするためにボクシングの練習をした」と述べている。さらに彼はボクサーの体質を述べる中で「突出た腹は相手の一撃を遠のかせるから有利である」と考えている。このような記事の大部分は余り価値がないけど、ギリシアのボクシングに於いてボデー・ブローが実際に行なわれていないことが、彼の記事から明確に推論づけられる。確かにボデー・ブローは壺絵の中にも決して見ることはできないし、接近戦(第72図)になっている時でさえ、ボクサーはボデーでなく、お互いに相手の頭部を打ち合っている。

壺絵に先ず見られるのは、左手を防禦に、右手を攻撃に、ほとんど占有的に使用していることである。実際に左手のブローは決して見られないけれど、右手はほとんど固く握り締めて打ち込むために常に後方に引いている。しかし、ボクサーが左手を出るだけ長く伸ばせば、相手を防禦するために右にステップするか、あるいは防禦を崩すことによって右手を相手の頭に伸ばすことしかできないから、左手を防禦に、また右手を攻撃に、という論拠は正しいとはいえない。第1に、そのような方法でホメロスやテオクリッスに述べられているノックアウト・ブロー、つまり顎の左側に強烈な一撃を送ることは可能であるが、当然、相手が右にステップしてその動きに応じるので、結果的には両者がお互いに効果のない円運動をすることになる。事実、相手に

(1) Philostratus 「Gymnastica」 10, 23

与える打撃として、そのようなブローを立派にやりのけることはめったにない。この打ち込みに於いて左手は常にかいている。第73図での右側のボクサーは顔を攻撃され、相手は攻撃をやめることなく、左手で狙撃している。実際のブローが描写されていたり、あるいはボクサーが倒れたり倒されている時には、常にそのブローは左手で打ち込んでいる(第74, 75図)。そこでギリシアのボクサーは両手を使用したという結論になるが、この結論はホメロスやテオクリッス、その他の著者達の描く闘いの記事からも確証することができる。

右腕の構えは主に振り回すようなランド・ヒットや腕を曲げて側面を突くフック・ヒット、それにアップパー・カットや切り込むようなチョップ・ブローのために使用されたことを示している。しばしば右手はノックアウト・ブローに備えて後方に振っている(第73図)。また切り込むようなチョップ・ブローのために右手を上にあげ(第72図)、さらにまれであるけれど、ストレート・パンチを意図するように肩の辺に右手を置いている。しかし、ストレート・パンチは左手で打つことが規則になっているようである。左足を前に出し、右足を常に地面から上げているので、パンチ力は突込みから得ていることは明らかである。第74図にはこめかみに左のストレートを送っている絵があり、第75図ではボクサーが相手の顎を左のストレートでもってノックアウトしている。第76図はギリシアの芸術家がパレストラで得た動機を神話的な題材に導いた素晴らしい例である。ケンタロウスと闘うラピタイ人は常に熟練した競技者として表わされ、ここには地面に投げつけようとしてケンタウロスの首に腕を巻き付けた1人のラピタイ人を見ることができる。

壺絵に見るギリシア・ボクサーのフットワークは自然で余り軽快ではないが、突込みによってブローに力を与える方法を知っているので、恐らく足を変えることの重要性を解していないようである。しかし、ボクシングの記述の中には素早いフットワークの価値がはっきりと認められている。バキリデスは「ライオンのような魂と軽快な足⁽¹⁾を持ち、頑丈な手を持った」ケオスの青年アルゲイオスがイストミアの競技会で少年種目のボクシングに優勝した模様を描いているし、フィロストラトスは「特にボクシングを除くと、ほとんどそうであるが、大きな筋肉を持った人間を見ることはできない」と述べ、「ボクサーはゆっくりと前進して相手の動きを容易にとらえる」と述べている。

これらがBC 5世紀のギリシア・ボクシングの一般的な特徴である。それは両手を

(1) Bacchylides, i.

(2) Gymnastica, 34

自由に使い、足は活動的でかなり攻撃に変化があり、その型は少々便宜的であるが、片手の構えというよりも、今日の自由な構えと似たところがある。後代の文献から、ギリシア人はさっと身をかわすドッジング、ひょいと体をかがめるダッキング、滑り込むスリッピングに精通していたことが分かる。この構えの欠点は攻撃を封じて下方への切り込むようなチョップ・ブローを促がす左手を防禦するには高目である。ボクシングが重量級の独占物になった時に、そのフォームは益々その機能力を十分に発揮させないものになり、闘いは一層緩慢なものとなった。BC 4 世紀の重量級のボクサーが闘う姿を描いた第77図には、大きなボクサーの防禦が如何に困難であるかが示されている。これは恐らくスパイライと身を切るような皮紐がBC 4 世紀初頭に導入されたからであろう。しかし、救済策としてのこのグローブは問題を一層悪化させるだけであった。身を切るような鋭いグローブの一撃は闘いの結果をしばしば決定的なものにしたようで、前腕は腕当てで保護し、全く不格好な姿勢が承知のように生まれている。活発さや技術に頼っていたのに代わって、重量級のものは益々固い防禦に頼り、相手を疲れさせるまで防禦できるように長時間にわたる練習を行なった。この馬鹿げた格好はデイオン・クリソストモスの高等修辞学の話の中で頂点に達している。その中には皇帝チツウスに寵愛されたメランコマスが2日間も防禦を保ち、相手を打たずして勝利を掴んだことが描かれている。⁽¹⁾何世紀か後にヨウスタチウスはこれを飛躍して「この戦術でメランコマスは相手を殺した」と断言して書いている。⁽²⁾スポーツ的な話の発展は後代の注釈者達によって邪推され、信用できない記事に変わることがこれに説明されている。しかしながら、デイオンは自分の時代のことを書いたのであるから、彼の物語は当時のボクシングの模様を書いたものであり、その証拠になることは明らかである。そうした防禦は後代のギリシア・ローマの詩人の記述の中に多く描かれている乱強打の使用を説明したものであり、これらの記事の中に技術的なボクシングの衰退を見ることができる。しかし、ヘレニズム時代やローマ時代に発達したものをBC 5 世紀のギリシアのボクサーにその責任を帰すべきではない。

比較することはできないけれど、現存する闘いの記事で最もその模様を如実に表わしているのはテオクリッスのイテル・22巻のアミュキュースとポリュデウセスの間の闘いである。技術と動きを武器とした伝統派のボクサーと、粗暴で自惚れ強い賞金目当ての競技者の闘いであるが、恐らく詩人はアレクサンドリアの有名なボクサーを描いたものであろう。その腹はちょうどファルネセのヘラクレスのようで、腹の筋肉は

(1) Orate, xxix.

(2) Eustathius, 1322, 1324

「円い岩石のように」突き出ていた。彼は泉のそばに座って日光浴をしていた。彼の耳は多くの試合で傷つき押しつぶされ、陰うつに泉を見つめていた。ポリュデウセスが近寄ってきたとき、品格のある雅量をもって彼はポリュデウセスに挑戦を求めた。ボクシングの皮紐は柔らかいものではなく、固い紐が用意される。直ちに彼らは牛の皮帯で手を強く固めて両手に長い紐をぐりぐりと巻き付け、それで激しい闘いが行なわれた。背中に日光を受ける体勢を取る争いが起こる。一層活動的なポリュデウセスは当然気のきかない相手の裏をかく。悪い体勢になったアミュキュースは両手でめちゃくちゃに盲襲したが、ポリュデウセスは相手の顎に一撃を与え、攻撃を阻止した。再び、アミュキュースはポリュデウセスの頭の下に突進し、全体力を振り絞るアミュキュースがポリュデウセスを短時間に倒すと、ギリシア人達は思った。しかし、ポリュデウセスは彼のラッシュを右手や左手でさえぎり、その合い間をぬって彼の目が腫れ上がって見ることの出来なくなるまで口や顎に強打をはなち、最後には鼻柱に一撃を送って、アミュキュースをノックアウトした。彼は立ち上がり、再び試合は始まったが、彼のブローは短くめっちゃめっちゃで、ポリュデウセスの胸や首横に倒れかかった。ポリュデウセスは相手の顔面に強打をはなとうとして打ちまくった。捨鉢になったアミュキュースは左手でポリュデウセスの右手を掴み、「左腰から巨大な拳を振り上げるような」左の振り打ちでポリュデウセスを倒そうと試みた。これはノックアウト・ブローの素晴らしい記述であるが、アミュキュースの動作は余りにも緩慢であり、明らかに相手の手を掴む動作が彼の動きを台無しにしている。ポリュデウセスは頭を横にそらせてよけ、右手でもって相手のこめかみに「肩を押し込むように」して一撃を送り、それに続いて左手を相手の口もとに送った。そのために相手の歯はがくがくになり、アミュキュースが地面に気絶して情を請うまで、敏速なブローをどしどしと顔面に打ち込んだ。

これは正に名人的な執筆である。テオクリツスはボクシングを熟知しており、これによって3世紀初期までボクシングの技術が存在していたことが分かる。この試合は技術と獣的な力の闘いで、アミュキュースは、背が高く体重があったので、有利であったけれど、何の技術もなく絶望的にまごまごしている。そのために防禦を無視して両手を乱雑に打ち、相手の頭の下側にラッシュした。防禦にまわったポリュデウセスは暴れ者を疲れさすために身をかわしたり体を屈めたりしてそれを避け、顔をねらい打ちしてそれをさえぎった。この時、彼は左のストレートをはなっていることはほとんど疑う余地がない。

これと同じ記事が同時代のアポロニオス・ローデウスの「アルゴナウチカ」⁽¹⁾の中にもう1つ別な記述として生き生きと描かれている。アポロニオスはテオクリツスのようにボクシングの描写の仕方を知っているけれど、獣的なものと決めつける記述が多い。グローブはテオクリツスのようにスパイライではなく、温泉場 Terme のボクサーが使用した「身を切るような皮紐」である。アミュキュースは手を固い隆起でもって形を作り、自分でグローブを作っている。後退したり身をかわしたりするポリュデウセスと闘うが、ついにアミュキュースは耐えきれず、戦いはたけなわに入る。両者とも疲れ果て、お互いの同意で離れて休息を取った。しばらくして再び、両者はともに飛び出し、アミュキュースは「牛を殺す人のように」背伸びしてポリュデウセスに大きく振り回した強打をはなとうとした。ポリュデウセスは横に身をそらし、相手がバランスを崩した時に足を前に進め、ノックアウトするだけのパンチではなく、相手を殺すような強打を耳上へ送った。結果は明らかにホメロスの叙述の模倣であり、手を加えていないが、アポロニウスは暴れ者が背伸びした時のことを加えて、「牛を殺す人のように」と述べているから、これはボクシングではないということを感じているようである。またウエルギリウスは彼の記事を模倣しているが、ボクシングを英雄的なものと考えているから、その意味に解していない。

「アエネイス」に出てくるエンテルウスとダレスの闘いの性格はカエスタスの記述であるからはっきりしている。エンテルウスは英雄エリックスのカエスタス・リングを挿入しているが、それは鉄と鉛の釘のついた7本の固い牛皮紐からなるもので、絶えず血で頭が汚れるものである。カエスタスを見ると直ぐにダレスと見物人は身震いする。エンテルウスは「何でお前はこれを恐れているのか」、「お前はヘラクレスの武器を恐れているのか」と叫ぶ。アエネアスの忠告によってこの恐るべき武器は除かれたが、ローマの詩人はボクシングの全歴史をあばこうとしているもので、そこに興味がある。既にカエスタスがホメロスの柔らかいグローブから如何に発達してきたかを見てきたが、ローマ人にとって、人を殺すことと、血を流すことは試合の本質であり、上に過去の英雄達は体力に於いて今日の人間より卓越していたから、彼らが流血の戦いと獣的な殺人武器を持ったことは当然のことであったのかもしれない。

両者ともにつま先立ちになって、出来る限りを尽して打ち合う。大柄であったエンテルウスは一瞬防禦に回り、活発に動く相手を一定の間隔に保ちながら、しばらく防禦に努めて、その戦術で相手を疲れさせた後から、大きな力を振り絞る。背伸びをするようにしてエンテルウスは虚飾的に腕を高目に上げると、これに当たったダレスは何

(1) Argonautica, ii. 25~97

ギリシアの競技



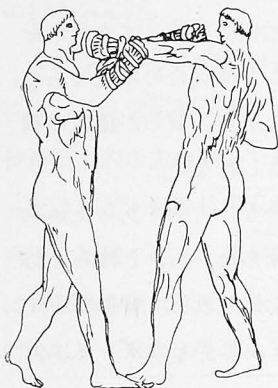
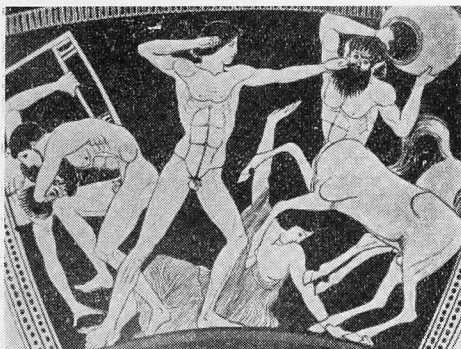
←第75図 ノックアウトの場面

BC 6 世紀末の汎アテナイ黒絵壺 ルーブル美術館 F. 278. 「Journal of Hellenic Studies」 xxvi, p. 222.

第76図 ケンタウロスの頭に左のストレートを射つラビタイ人

BC 470~460年頃のアテッカ赤絵壺 フローレンス美術館蔵。

壺絵の場面はベイリトウスの結婚祝宴を示している。ラビタイ人は野蛮な敵と闘うギリシアのすぐれた競技者として表わされ、彼の左のストレートは実に素晴らしい。同じくレスリングをしているところも優れている。若いラビタイ人はほとんど両足が持ち上がるまで重そうな怪人を揺さぶっており、怪人は卓台を持ってそれを防いでいる。



←第77図 スパイライをつけたボクサー

BC 336 年のビュソデロスの執政官に結びつく汎アテナイの黒絵壺 英国博物館、B. 607.

第78図 ボクサー、パンクラチスト、武装競技者

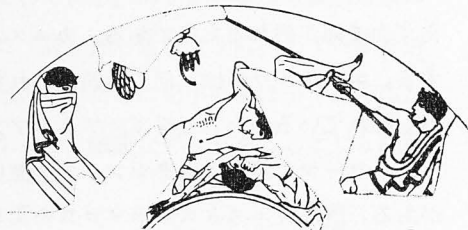
BC 480 年頃のアテッカ赤絵皿 英国博物館、E. 78

2 人のパンクラチオンの競技者が地面で闘っている。トレーナーが「目をえぐる」のを止めようとしている。「Journal of Hellenic Studies」 xxvi, pl. 13.



第79図 口に手を入れるパンクラチスト

BC 480 年頃のアテッカ赤絵皿 パルチモア美術館 Hartwig「Meistershalen」lxiv.「Journal of Hellenic Studies」 xxvi, p. 9.



第80図 倒れた相手をなぐるパンクラチスト

BC 6 世紀末のアテッカ赤絵皿の断片 ベルリン博物館、2276. Hartwig「Meistershalen」 Fig. 12.



がくるかとじっと注意を傾ける。もちろん、ダレスは力強い打撃をかわし、エンテルウスはバランスを崩し地面に倒れた。倒れて激怒したエンテルウスは立ち上がり、衰れんでアエネアスが闘いを止めるまでダレスを追い回した。中止によって復讐を逃がしたエンテルウスは激怒に捌口を与えるために賞品の牛を一撃で殺して自分の力を示した。寛大な心を持ったエペイウスが倒れた相手を引き起こし、丁寧に立たせてあげたイリアスの最後とは何と対照的であろう。テオクリツスとアポロニウスの記事にも、対照的なものがある。そこでの闘いは技術と獣的な力である。ウエルギリウスに於ける2人はボクシングに無知であると同時に技術的なものに欠けている。もしエンテルウスとダレスのどちらも技術的なものを持っていたなら、負けたのはダレスであろう。

さらに馬鹿げた結果はスタチウスの記事の中に思い浮んでくる。軽くて技に優れたボクサーが勝者であると宣告されたが、相手の憤怒と復讐からただ救うために、アドラツスが仲裁に入ってそれを引き分けにしている。これらの後代の試合に現われている獣的なものと馬鹿げたことは、ここでこれ以上論じる必要がない。カエスタスの試合はローマの群衆に受けたかもしれないけれど、それはボクシングではない。

VIII パンクラチオン

パンクラチオン⁽¹⁾は荒っぽく転げ回る原始的な闘争から発達したもので、文字通り全(Pan)力(kratos)で闘う競技である。その目的はボクシングと同じように相手に負けを認めさせることで、この目的のためにはほとんど如何なる手段でも使用された。一見して、このような競技は野蛮で獣的に見えるかもしれないが、厳格な規則の下で行なわれ、これらの規則は鞭を持ったトレーナーや審判官によって施行されたことを記憶しなければならない。さらにギリシア人はこの競技を持持久だけでなく、最も高度な技を必要とする競技と見なしていたことが分かる。ピンダロスの讃歌の少なくとも、8つ以上はパンクラチオンの競技者を称えたものである。事実、パンクラチオンは明らかに自己防衛の最も高度な科学体系である柔道と全くよく似たものである。従って、柔道で禁じられているものはパンクラチオンに於いてもほとんど禁じられている。もちろん危険なものであったが、ピンダロスが語るように「危険のない行為には名誉がない」⁽²⁾。大きな傷害や致命的な事故もしばしば起こったけれど、それはごくまれなことであり、恐らく今日のボクシングやサッカーよりも事故は少なかったと思われる。

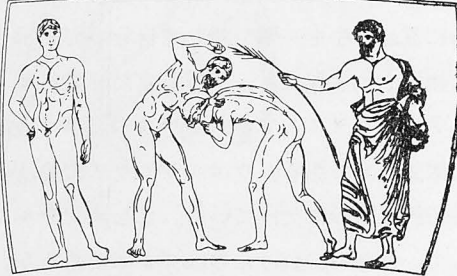
パンクラチオンを最もよく描写しているのは、相手に負けを認めさせてから、死ん

(1) Journal of Hellenic Studies, xxii.

(2) Pinderos 「Olympic Ode」 iii.

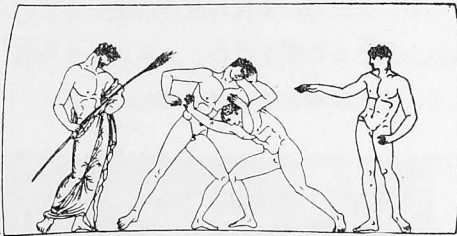
第81図 パンクラチオン

汎アテナイの黒絵壺「BC 332年のニケテスの執行官」英国博物館、B.610.
「Journal of Hellenic Studies」xxvi, pl. 4.



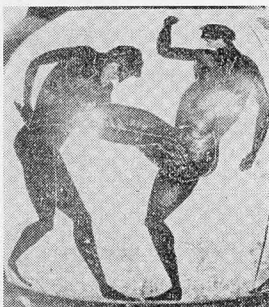
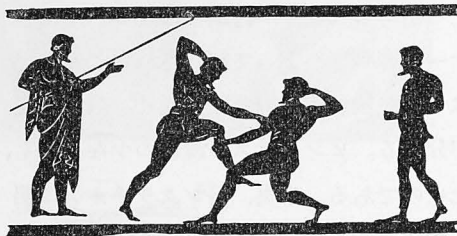
第82図 パンクラチオン

BC 370~360年頃の汎アテナイ黒絵壺 英国博物館、B.604.
「Journal of Hellenic Studies」xxvi, pl. 7.



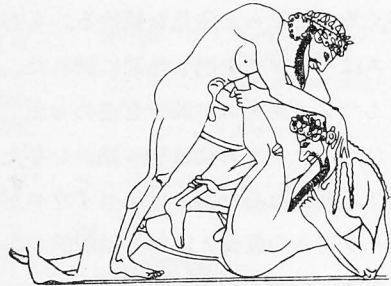
第83図 パンクラチオン

BC 6世紀末の汎アテナイ型のアテッカ黒絵壺
ウィーン美術館蔵
「Journal of Hellenic Studies」i, pl. 6.



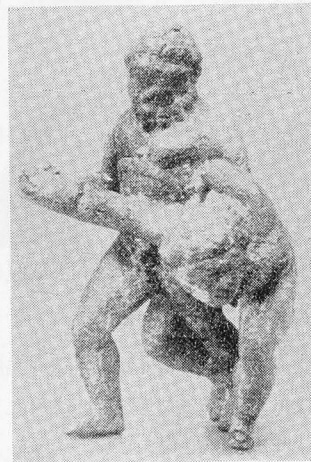
←第84図 蹴上げと足持ち

BC 5世紀初頭の汎アテナイの黒絵壺
ニューヨーク、メトロポリタン美術館、16.71.



第85図 ヘラクレスとアンタエウス

BC 6世紀末の黒絵水壺 ミュヘン美術館、1708. 「Journal of Hellenic Studies」xxvi, p. 21.



第86図-a

腕固め
英国博物館
所蔵のヘレニ
ズム時代のレ
スリング組像
相方とも立
っているパン
クラチオンの
競技者が相手
を承服させる
のに腕固めを
している。
Siveking
「Bronzen den
Sammlung
Loeh」p. 52.



第86図-b

だけれど、優勝の葉冠を受けた有名なパンクラチオンの競技者、アルリキオンの死を述べるフィロストラトスの記事である。彼は「パンクラチオンの競技者は危険な型のレスリングを行なう人である」と述べている。この競技は相手を倒すことによって勝利を得るものであるが、それにはレスラーにとって危険な背中落しの組みや掴み技を使用し、相手を蹴ったり、相手に飛びついたりする外に、相手の足首を取って組んだり、腕をねじったり、色々な押え込み技を身に付けていなければならない。これらの運動はすべてパンクラチオンに属するものであるが、ただかんだり、えぐるOrytteinことは禁じられた。スパルタではそういったことさえ認められたが、エリスや大きな競技会では、絞め技は認められたけれど、かむことやえぐることは禁じられた。

かむことやえぐることの禁止は明らかに規則から引き出されたもので、アリストファネスの文章の中にも2箇所、その引用が出ている。かむことは注釈をつける必要はないが、えぐるという意味は相手の目、鼻、口などの柔らかな部分に手や指を突込むことで、このことはアリストファネスの文章からはっきりと分かる。⁽²⁾第78図にはパンクラチオンの競技者が指を相手の目に入れ、審判官がこの違反行為を罰するために、鞭を振り上げて止めようとしているところが描かれ、第77図にも同じような場面がある。そこではパンクラチオンの競技者が倒れた相手の口を押し込んでいる。パンクラチオンの競技は一組のレスラー達のように組合って蹴ったり打ったり組んだりし、お互いに激しく地面を転げ回って相手を押え込もうとするものである。ほとんど初めは拳で打ち合うが、手は素手で、このような競技では当然かもしれないけれど、一般に開いている。また拳固も使用された。この2つの実際的な場面は第80図に描かれている。倒れた競技者は鼻血を出し、その背中には血の手跡があり、飛びついている相手は左手で片手を取って右手でやっつけようとしている。ボクシングのように倒れた時に打ってはいけないという規則はないが、概して勝負は地面で決められるから、両者とも倒れた状態で闘っている時に打つということは余りないようである。

打つこと、組合うことのどちらが重要であるかは大部分個人的なものに左右される。長い手足を持った大きい男は自然に打つことに頼るようになるし、ずんぐりした者は組合うことが得意になるであろう。第81図、第82図にはボクシングとレスリングを混ぜ合わせたものが見られる。一方が相手を脇の下に挟みながら拳固で打ちつけている。第83図の高い方の競技者は相手を打とうとして跳び上がっており、低い方の男は上がった足をとらえようとしている。第84図にはその足をとらえたところが明確に示され

(1) Philostratus 「Tmagines」 ii. 6

(2) アリストファネス 「鳥」 422, 「平和」 899

ている。ここで右側の競技者は蹴ることによって相手から下腿を手にとられ後方に傾き⁽¹⁾かけている。蹴りはパンクラチオンに於いて重要な役割を演じ、テオクリツスの記述の中ではアミュキュースに挑戦したポリュデウセスはボクシングの試合であるのに蹴りを認めるかどうかをたずねているし、オリムピック競技に関する諷刺文の中でガレノス⁽²⁾は蹴ることに於いてあらゆる動物の中で優れているロバのような男レイエルにパンクラチオンの賞を与えている。腹を蹴る to gastrizein⁽³⁾ ことはフランスの頭や足を使うボクシングのサバートと同じようにパンクラチオンに於いても有効な戦術である。フィロストラトスがパンクラチオンのレスリングを特徴づける「危険な」という形容詞は、正規のレスリングに於いて余りにも危険なものであるけれど、投げるだけでは不十分で、相手を痛めつけなければならないパンクラチオンでは背負投げや各種の足取り技の投げを自由に使うことをさしている。

レスラーは勝つために相手の背中が地面につくように投げるが、パンクラチオンの競技者は相手を一層痛めつけて相手の不利な体勢に持って行くために意図的に相手の背中が地面に打ちつけるように投げたようである。踵の突投げ apopternizein と呼ばれる戦術はハルテレスという仇名を持ったギリキスの競技者によって考案されたもの⁽⁴⁾で、彼がデルフイの競技会に行く途中、英雄プロテシラウスの神殿を訪れ、パンクラチオンに勝つ方法を神に求めると、「踏みつけるべし」と答えたので、最初、当惑したけれど、しばらくして英雄の忠言は「相手の足を持って組合った場合には相手の足を離さずに相手を下にして踏みつけなければならない」ということを知り、それで踵の突き技をあみだし、非常な名声を得たという。これは恐らくフィロストラトスが足首を持って組むと述べる技であろう。この取り方は相手を決定的に痛めつける技であるが、この方法の特徴はただ相手を投げる代わりに相手の足を持って足をねじったり曲げたりすることを経けざまに行って相手を崩れさせるものである。この足固め技は柔道に於いてよく知られており、アルリキオンも足の踵をねじって相手を崩している。

レスラーが背中を地面につくように投げるもう1つの投げ方は柔道で用いられる巴投げである。相手の肩や腕を握って腹に足をそえて相手を頭上越しに後方へ投げるもので、これはペニ・ハッサンの墓壁画にも描かれ、また日本人も好んで投げる方法である。恐らくピンダロス⁽⁵⁾が両足を外側に開いて鷲の襲撃を防ぐキツネのような技巧を

(1) Theocritus, xxii, 66

(2) Galenos 「Protrepit」 36

(3) Lucianos 「Anacharsis」 9. Aristophanes 「Equit」 252, 454

(4) Philostratus 「Heroik」 53, 54

(5) Pinderos 「Ithmean Ode」 iii, 65

持ったものとしてメリスースを述べる時、その巴投げの技を防ぐ技術をさしているであろう。第85図が恐らく巴投げを表わしたもので、ここでアンタエウスは右手でヘラクレスの足を取り、腹に左足をあてながら仰向けになって巴投げをしようとして失敗しているようである。

パンクラチオンは柔道と同じように相手に負けを認めさせるという動機があるので、首や手足を固める特殊な技がある。この固め技は常に勝負を地面で決する時に多く使用される。腕固め *to strebloyn* の最良の例は既に述べた銅像に思い起こすことができ、第86 a 図には青年と組合っているずんぐりしたひげの男を見ることができる。後者では両者とも立った状態で、その男は相手をねじ伏せようとして、右手でもって相手の右手を腿越しに引ばっている。自分の左脇の下に相手の手を挟み込み相手の脇の下から相手の首をとらえ、相手の腕を使えないように殺し、半ネルソン固めに似た槌の原理を応用している。恐らくその取り方は次のような方法で得られたと思われる。男が青年の左腕を取り、素早い動作によって彼を引っ込んで回し込むや、背後に回るために左に動き、相手の脇の下に左手を滑り込ませて相手をとらえると同時に、相手のバランスを崩す程度まで右に回し、この体勢から相手を投げるができる。形式的に考えると、この像は立技のレスリングを表わしているようである。しかし、右腕固めの実際的な目的は相手に苦痛を与えて屈服させるもののようである。もし相手が屈服しなければ、腕は折れてしまうであろう。さらに青年を膝まづかせてその上に乗る体勢になれば、一層容易になるだろう。この解釈を確かなものにするには、もう一つの群像によってはっきりさせることができる。

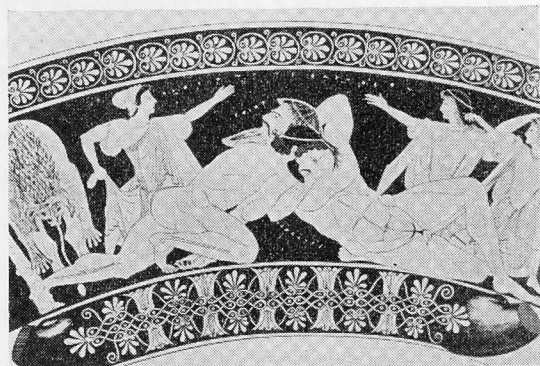
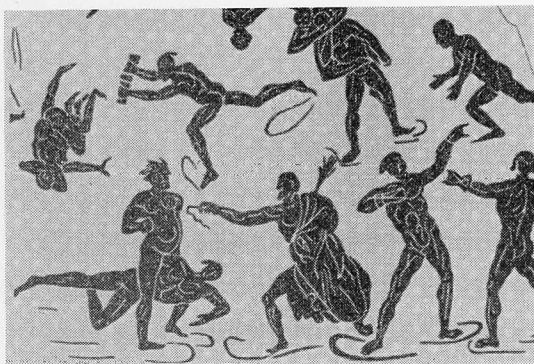
第86 b 図に於いてはレスラーの一方が膝まづき、その上に相手が乗っている。彼は相手の左足を巻き固めの状態に左足をかけ、右手で相手の頭を下に押し、左手で最初の組と同じような方法で右手を後で押えている。ここでの目的は苦痛を与えるだけであり、足固めで勝つには、さらに膝を沈めて両者とも地面に膝をつけた状態で背中に乗らなければ不可能であろう。この組の像で変わっているのは、勝者が左手で相手の首を下に押し押さえていると同時に、右手で相手の腕を肩の後方にねじりつけていることである。

エリス人は相手を打ち負かす手段として特に「窒息させる絞め技」を奨めている。これは非常に獣的で残忍に見えるけれど、とりわけ首にノックアウト・ブローを与えたり、相手の水落や心臓を突打ちするものと、その残忍性は変わらない。ここでも柔道と同じものを見ることができるが、柔道の競技者は喉絞めを行なうだけでなく、それに抵抗できるように喉の筋肉を発達させている。熟練したパンクラチオンの競技者は、

第87図 体育場の光景

ツスクルムで発見されたモザイク画 ローマ後期の作品。

左上には地面で組合うレスラーと右上の2番目に立って組合うレスラーがいるが、どちらの場合も片方のレスラーが相手の背中にとびのって (Klimakismos) いる。



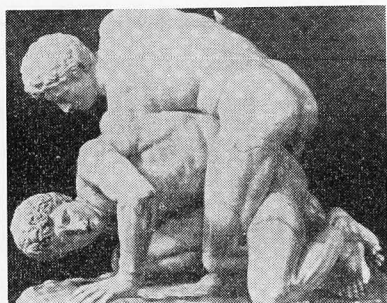
第88図 ヘラクレスとアンタエウス

BC 520 年頃のアテッカ赤絵壺 ルーブル博物館、G. 103.

第90図 地面での争い

BC 500 年頃のアテッカ黒絵鉢 ニューヨーク、メトロポリタン美術館、06. 1021. 49.

この壺はフローレンスのレスラーと非常によく似ており上記の勝者に見る上方の腕は正しい復元であることを証明している。



↑ 第89図 地面で争うパンクラチスト

BC 300 年頃の銅像を大理石に模刻したもの フローレンスのウフィジイ美術館蔵

この像の大部分は破損しており、その多くを正確に復元することは難しいことである。両者の頭、上方の右腕（恐らく左腕も）、左足と膝、それに下方の左腕が復元されたものである。Hans Lucas 「Jahrbuch des deutschen Archäologischen Instituts」 p. 127. 「Journal of Hellenic Studies」 xxv, p. 30.



相手が大きな傷害を引き起こすような握りを取った時に、即座にそれをはずすことができる。絞め技は相手の首を取るによって得られるが、好んで用いられる方法はいわゆる「はしご登り」Klimakismosと呼ばれるもので、攻撃する者が相手の背中に飛び乗り足を胴がらみして腕を首に回すものである。この技は、両者が立っている時と地面で転げ回っている時に、使用することが可能である。2つの形式が第87図のツスクルムのモザイク画に表わされている。これは一般にトリトンやアケロウスと闘うヘラクレスによって用いられている押え方で、絶えず文献にも述べられている。地面での争いは今日のレスリングと同じように、ある時には格闘者が大の字になり、ある時には四つんばいになったり、お互いに上になったり下になったりして複雑なものであったと思われる。プラトンが嫌がっているのはパンクラチオンのこの部分であり、人間に立つことを教えないから軍事訓練として不適であるとし、彼の「理想国」から省いている。恐らく今日のレスラーと同じように、パンクラチオンの競技者は致命的な投げや足蹴りを避けるためにマットのようなものを使用したり、あるいは泥の中で練習したと思われる。そうであるとすれば、それはスポーツの衰退の兆候である。特にピンダロスがパンクラチオンに於けるボクシングの重要性を強調しているように、寝技のレスリングはBC 5世紀の壺絵にはめったに描かれていない。あったにせよ、それはヘラクレスとアンタエウスの闘い(第88図)に限られたもので、後代の宝物品類にもごくまれにしか見られない。最良の例はフローレンスのウフィズイ美術陳列館にある有名なレスラーの組像(第89図)である。同じ構図を取っている壺絵(第90図)と比べると、その復元は正確なものであることが推測できる。⁽¹⁾両者とも膝まづいた姿勢を取り、上方のレスラーは相手の胴を足でからめ、左手でもって相手の右腕を背中に曲げ、右手で相手をなぐろうとしているようである。相手は右腕で自分を支え、敵の隙をねらおうと熱心に注意している。既に述べたアルリキオンの物語からこれを説明することができよう。彼の相手はアルリキオンの上に乗り、腕と足で彼をからみ、押え絞めしているが、最後の一呼吸をとるや、アルリキオンは自由になった左足を使って押えを瞬間に外し、転げ回りながら相手の右足を取り、相手が負けを認めるまでそれをねじりつけて相手を打ち負かすことができた。

レスリングやパンクラチオンのようなスポーツは色々な規則や型が当然生まれてくるが、ギリシアの大きな民族的祭礼ではそれを一様性にする傾向を持っていた。しかし、疑いなく地方的な規則も存在していた。そうした規則の例は恐らくA. D. 2世紀の碑文と思われるものがビシテイアのファスシルエル村で発見されているが、その中

(1) Journal of Hellenic Studies, xxvi, p. 19

ギリシアの競技

にある地方的な祭礼のスポーツ規則がある。それによると、パンクラチオン競技者はレスラーのように塵の付く砂 *Aphi* を使用しないばかりか、レスリングを使うことなく、立ちながら打ち合うもの *orthopaiia* である。言葉を変えれば、レスリングをするのでもないし、また地面で闘うものではない。単に素手や恐らく足で蹴って闘うだけであろう。さらに1つの賞品を得た男は同じ日に再び闘ってはいけないということと、奴隷が勝った時には相手の競技者に賞金の4分の1を渡さねばならないと書き加えてある。⁽¹⁾

結 語 (要 約)

古代ギリシアに於ける競走種目は短距離競走 *Stade*、往復競走 *Diaulo*、長距離競走 *Dolichos* で、すべて直線の走路を走るものであった。スタートは身体をやや前かがみにして、2本の条溝の入った敷居に両足を置いたスタンディング・スタートであった。出発の合図は触れ人の「ドン」*Apite* という言葉で行なわれ、もし不正出発をした場合には、鞭で打たれ、厳重に懲戒された。スターデ競走は単一の長さの走路で、ディアウロス競走は言葉が示すように二本笛に似た走路であった。そのため、各走者はスタートする場所の反対側の柱まで真直ぐに走り、それを回って平行走路を取って戻ってきた。ドリコス競走の場合、両端の中心柱以外に全部取り去って、この柱を回って往復した。走者のフォームは今日の走者と余り変わらない。

五種競技は競走、跳躍、円盤投、槍投、レスリングからなる混成競技で、この5つの種目はギリシア体育の基礎をなすものであった。特にペントスロン特有の跳躍、円盤投、槍投は、ギリシア人に愛好されたリズムとハーモニーを必要とした運動で、跳躍などは練習に於いても試合に於いても笛の助奏がついた。優勝者の選出は4種目にそれぞれ首位になった者の間で成績を比較し、3種目の中で何かの種目に負けている競技者は除外され、もし誰かが4種目のうち、3種目に首位になっている場合とか、3種目の中で他の誰かを負かしている場合、唯一の残存者となり、優勝者になった。しばしば2種目に相手を破って同位になった場合、2人から4人の競技者が残り、この場合のみレスリングが行なわれ、レスリングの勝者が3種目に相手を負かした「三重勝者」、つまり五種競技の優勝者になった。

ペントスロンは1スターデを走る短距離競走に始まり、跳躍、円盤投、槍投、レスリングの順で行なわれた。跳躍は石か、金属製の重り *Halteres* を持った走幅跳であ

(1) Papers of the American School of Classical Studies at Athens, iii. no. 275
「Classical Review」 xliii, p. 210

った。競技者は2, 3回ハルテレスを振りながら短い助走を取り、踏切る瞬間に力強く前方に振り、空中で足と腕は平行になって、着地の時に素早く後方に振り落ろした。この運動は跳躍距離を伸ばすにも、またギリシアで非常に重視されたフォームを確実にするにも役立った。跳躍は走路の端で行なわれ、石の敷居が踏切板、Bater として用いられ、この前方の地面を掘って柔らかく丁寧に滑らして砂場 Skamma を作り、各競技者は跳躍ごとに木釘がさされ、すべての者が跳躍を終えると鞭 Konnon で計測された。

円盤は金属製か、石のものであった。投てき場は Balbis といって、前と両側を線で印し、そこから投げた。壺絵に描かれているフォームは色々であるが、投げる原理はミロンの円盤選手像 Diskobolus に表われているように常に同じである。砂で円盤をこすった後、投てき場は右足を前にして円盤を右手に持ちながら、前の線の手前に立ち、頭の所から、それよりも高く、両手で前方に振り上げると同時に、左足を前に出し、再び左足を戻しながら勢いよく後方に振り落ろし、ミロンに表わされている姿勢を取る。それで活発に振り上げて、全身を真直ぐに伸ばし、前方に円盤を振り上げる時に一歩前進し、振子のような運動を繰り返して投げる。従って、今日の円盤投のようにサークルから投げるのではなく、恐らく競技場の石の敷居が円盤投と槍投のバルビスとして用いられた。

槍投は穂先に重味をつけ、遠くに投げるものと、的当てするものがあり、馬上から投げる競技もあった。五種競技の槍投の場合、的に当てるのではなく、ただ距離を投げるだけであったが、一定の幅を持った制限領域内に投げなければならなかった。槍は150cm から180cm ほどで、柄の中心部に短い投紐 Amentum が付いており、それに入差指か、中指を入れて投げた。

レスリングはギリシア競技の中で最も人気のあった競技で、パレイストラという名がレスリングの学校を意味するように体育の本質的な役割を演じていた。使用された型はパンクラチオンにのみ許された寝技のレスリングと、反対の立技のレスリング orthepale とギリシア人に呼ばれ、その目的は相手を投げることで、日本の相撲と類似している。しかし、壺絵には膝を地面に付けて投げているところがあるから、レスラーは膝から上の部分を地面に付けた場合に「投げ」と見なされたようである。勝つためには3回投げることが必要で、一緒に倒れた場合は何ともない。あらゆる取り方が許されたようであるが、試合の性質から脚を持つ機会は少なかった。足ばらいは自由に用いられ、代表的な投げには腰投げ、背負投げ、つかみ投げがある。

ボクシングは体重による組み分けがなく、これが破滅の原因となったが、競技を全

ギリシアの競技

く知らないウエルギリウスやローマの著者達の記述にまどわされてはならない。重い鉛と鉄釘の付いた殺人器、カエスタス *caestus* はギリシア競技に入っていない。指関節の囲りを固い皮輪の付いたギリシアのグローブ、スパイライ *Spairai* は十分恐るべき武器になったけれど、BC 5 世紀の壺に描かれているボクシングの皮紐 *imantes* は指の囲りを 3 m 位の柔らかい皮紐で巻き、手首と手の裏側を交互に巻いて固定したもので、打撃力を増すというよりも指を保護するものであった。ギリシアのボクサーは相当フットワークの知識を持ち、効果的に両手を使用しているが、体重による組分けがなかったことで急速に悪化し、これはラウンド制がなかったこと、ギリシアのリングが大きかったことにより一層早められた。従って、慎重な戦術がはびこり、ボクシングは持久性のものになった。これを活発にさせる手段として恐るべきグローブが考案されたのである。

パンクラチオンはあらゆる競技の中で最も興奮する試合であった。その名が示すように相手を打ち負かすために全力で闘い、素手でなぐったり、足で蹴ったり、投げつけたり、組打ちしたり、あらゆる手段が用いられた。しばしば腕をねじったり、窒息させたり、腹を蹴ったりすることも行なわれた。しかし、かんだり、えぐったりすることは禁じられた。一般に闘いはなぐり合いで始まり、レスリングで用いられる組み方や取り方、特に脚を持つことが行なわれ、大部分は寝技の試合になり、負けを認めさせるまで闘いが続けられた。

参考文献

1. 岡部平太著「陸上競技史」満鉄読書会編
 2. フェレンス・メゾー著、大島鎌吉訳「古代オリンピックの歴史」ベースボールマガジン社
 3. Pausanias [Description of Greece] Harverd University Press
 4. John Kieran [The Story of the Olympic Game] Lippincott Company
 5. Lynn and Gray Poole [History of Ancient Olympic Game] Ivan Obolensky, INC.
 6. Heinz Schobel [The Ancient Olympic Game] Studio Vista London. 1966
 7. K.A. Harris [Greek Athletes and Athletics] Hutchinson Company. 1963
 8. Willy Zchietzshman [Wettkompf- und Übungsstätten in Griechenland] Verlag Karl Hofman
 9. Zoachin Ebert [Zum Pentathlon Der Antik] Akademie Verlag Berlin 1963
 10. Werner Rudolph [Olympischer Kampsport in der Antik] Akademie Verlag Berlin
 11. Lugi Moretti [Iscrizioni Agonistiche Greche] Angels Signorell—Roma 1955
 12. Ccorc Themistokles Malteso [Olympia] E. Lincks crusius Verlag Kaeserslautern, 1959
 13. Ulrich Popplow [Leibesübungen und Leibeserziehung in der greecheschen Antike] Verlag Karl Hofmann, 1959
 14. Walter Unininger [Superman, Heroes and Gods] Thames and Hudson London, 1962
- ※本論の大部分は N.E. Gardiner の「Athletics of Ancient World」の記述に基づいている。

(本学助手・体育学)